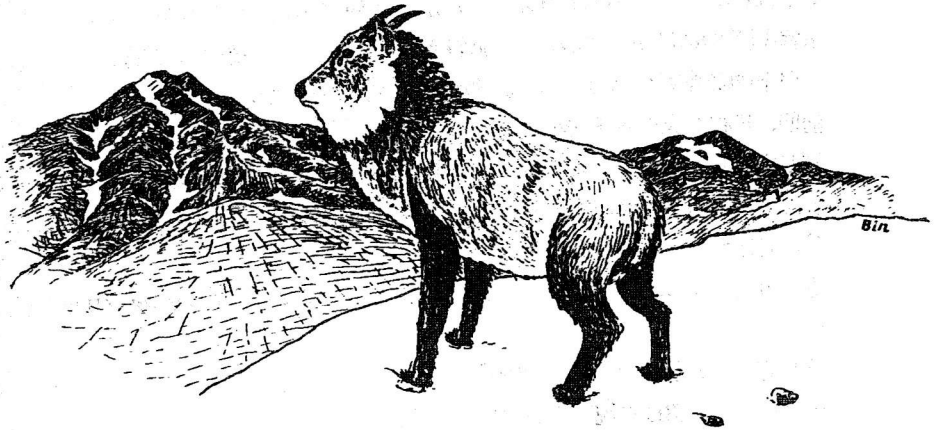


やまぎと

会報3号 (95夏号)



金沢大学ワンダーフォーゲル部・OB会

OB会会長の挨拶

13期 大島 良治

OBの皆様、お元気でお過ごしでしょうか。最近の全国的な話題としてオウム真理教の非道の数々がテレビ等で取りあげられています。この北陸の小都市金沢もオウムの舞台として利用されていた事を皆様も御存じでしょう。御蔭であの頃の金沢駅、高速道路のインターでの警戒は大変なものでした。でも、一件落ち着いた様で安心しました。

話題を変えまして、本とし7月1日を期して「東海ワンゲル会」が結成されるという事で、金沢より役員3名が出席を予定しています。「〇〇支部と、沢山の支部が結成される前触れかもしれない」と先日の役員会で話題になりました。

大学を卒業すると、2通りの社会人が出来ます。自分の世界を狭くするひと（仕事関係の世界しか知らない）、そして広くする人（仕事関係以外の世界も大事にする人）です。

後者の人が一人でも多くなる様に、ワンゲルOB会が力をお貸し出来るとしたら、本当にすばらしい事です。でも、あまり急がず、着実に進みたいとも思っています。

本年9月、倉谷ベルクハイムで、月見の宴を予定しています。修復なった山小屋で、皆様とお会い出来ると思うと、本当に待ち遠しいです。

万難を排し、是非参加下さる様、お願い致します。

倉谷・月見の宴

返信率は 450通発送中68通、13%。毎度のうっかりに加え、年末・年始にぶつかっていたこと、年があけての阪神大震災、地下鉄サリン、歯止めのかかない円高など、もろもろのビッグニュースに日本が大揺れしていたことから、こんなものといった数字でした。中止を考えなくもありませんでしたが、何か起こるかかわからない世の中だから、かえってやれる時にはやっておこうと進行させています。ご返信いただけた方々、おかげ様で、試案を練る参考になりました。ありがとうございました。

以下のように、うちあわせておりますので、返信葉書にて、申し込みをお願いします。前回、日程が決まっておらず、またあれからの情勢で事情が変わった方もおいでることと存じます。今回は正式申し込みですので、前回返信された方も、再度ご返信をお願いします。

7月末が申し込み締切です。申し込まれた方にのみ、以後の連絡（月見の宴に関して）をとり行います。

☆日程 9月23日（祝日・土曜日）

午後1時 金大工学部前集合（小立野キャンパス）

受付、会費納入

1時半 地元OBの車に分乗、出発

4時 倉谷での行事開始

9月24日（日曜日）

午前10時 犀川ダムにて解散



☆会費 3000円 当日払い

夕食・翌朝食代他。 以上の中には現役の食事代を含みます。

酒、おつまみに関してはご芳志を全面的にあてにしております。よろしくお願いします。

（会費設定は、遠路のOBも参加しやすい額に…が基準。不足がでた場合は、OB会行事なので、OB会会計からの補助を考えています。）

☆装備 かつての小屋行きを思い出してご準備下さい。懐中電灯、武器、食器。

（使い捨て食器の用意も考えていますが、ゴミを出さないためには自前がベストのようです。）

シュラフについては準備が必要な方は返信葉書に明記して下さい。レンタル料実費負担で、手配の便をとります。（もちろん毛布でも可）

☆高三郎登山希望について…この際は是非ともという方は返信葉書にてお知らせ下さい。

その場合、朝食を含め、自分で山行の準備を整えられて下さい。会の方では、登山希望者でテントをまとめたり、帰る時のために同じ車になるように、またその車をダムの奥の方に駐車させる、また事前に、誰が希望しているのか相互にお知

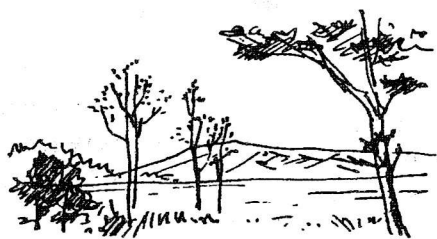
らせする…までの便宜をはかります。高三郎のコースについては、この会報中の椿川さんの記事中にあります。近年、登山道整備が進んでおらず、また9月下旬はブッシュが濃くなっている時期ですので、あまりお勧めできません。

☆追悼 昭和45年新トレで亡くなった15期桂さんの追悼も行います。「愁心」碑を補修・除幕(?)します。この補修構想は13期辰野さんが練り、その施行内容次第で、当日午前中、あるいは1週間前に入山も考えています。この事前準備については13期・15期の金沢勢が行います。

19期高桑さんの追悼については、同期の梶さんより「我々の期周辺での追悼はやっていくが、卒業してからの個人山行中の遭難であり、その点では一線を画しておいて欲しい」との申し出もあり、一応外します。倉谷への途中、彼の遭難碑がありますので、お参り下さい。

・その他 かなりの車がダムに停まることになるので、事前に犀川ダム管理事務所に連絡を入れます。

現役は月見の宴の数日前に入山し、宴終了後、一緒に下山することになっています。



OB会役員会の活動経過 とOB関係情報

(井は日時の確定していないもの)

12月24日 会報2号発送 (舟田 鳥越)

12月26日 OB会役員会通信N011発送

95年(平成7年)

1月17日 未明、阪神大震災発生

2月11日 23期周辺OB、白馬でワングル会

2月22日 現役よりビーコンの要望あり

35期吉田さんより在庫なしの返事

2月25日 OB会役員会通信N012発送

3月24日 36期より卒業一言入手

4月17日 OB会役員会通信N013発送

4月30日 OB17期小島さんより東海ワングル会開催の打診。

5月9日 兵庫地区OBにお見舞いと原稿依頼

5月28日 OB3期高島さんの知人、毛勝山で遭難。救助隊要請。主将に連絡。

29日 前田顧問に連絡。36期OB石川さん達が特機。梶さんにも連絡。

30日 現地に人数が集まり、待機解除。
OB会役員会通信N014発送

31日 高島さん挨拶にみえる。

6月2日 遭難者寺崎さん奇跡の生還。

6月7日 OB会役員会開催(大島 舟田 梶 椿川 鳥越 中川 石川 佐川)

6月15日 OB会役員会通信N015発送

井 名簿改訂・発送ラベル作成(名倉)
払込状況集計、発送人ラベル作成
(鳥越)

返信葉書作成(坂尻)

7月1日 東海ワングル会開催

井 印刷(中川)

製本手配(北川)

7月中旬 会報発送(椿川 久富)

この会報は、OB役員の時間をやりくりして作成しています。編集できたものから、順次印刷担当の中川さんへ送り出している…といった事情から、項目の配置もバラバラ気味、目次は作れずといった有様です。もう少し欲を出すと、結果は部誌ベルクハイムの二の舞を踏むことになるであろうと、情報の新しいうちに送付することに意義を認めていますので、読み苦しい点はご了承下さい。また、写真の方はいずれ40周年にでも、きちんとした製版を経たページにまめとめたいと思っています。とりあえず雰囲気を楽しまれて下さい。



☆年会費について

後のページのとおり、対象OB（450名）の半数から納入いただきました。また、そのほとんどが5年分一括でご協力下さいました。親睦団体であり、何がやれるかわからない状態をお願いしている点からは、たいへんありがたく、励まされる数字だと思います。1年間の支出がこれまでのようなものとすれば、どうやら40周年まではもちこたえられそうですが、余裕もち、かつOB会の基盤を固めていくために、お忘れの方には、重ねて納入をお願いしたいと存じます。

今年東海ワングル会が発足しましたが、全国で活躍するワングルOBが、よりOB会に参加し易くなる形として、各地区での支部誕生を応援したいと考えています。活動費を援助し、支部会の報告をOB会報に載せることで、より親睦の目的が達成できるのではないのでしょうか。今回のように、役員の出席で金沢の風を感じていただけるものなら、交代で参加することも考えています。

やはり、先立つものはお金。余裕があれば、あれこれアイデアも出てきますが、金詰まりとなると、細々延命措置を図るのみとなってしまいます。会費の納入で、心強い支援をいただけますよう、重ねてお願いします。

☆返信葉書の切手について

今回も、切手を貼っていただく形式でお送りしています。前回の返信率が13%。これをOB会が負担する形で発送していた場合であれば、2万円近いお金が無駄に消えたことになります。すぐ、投函できる形であれば、多少の返信率アップが見込めるものの圧倒的に損失の方が大きいように思われます。（信用していないといえ、そうなるのですが…）

今後も、切手を貼って投函のご足労をお願いしたく存じます。（私共は一通一通をお人柄を偲びながら、拝見させていただいております…ご協力を。）

☆返信を私信に使う件について

わずかですが、せっかくの返信に、私信であると掲載を拒否するものが混じっていました。

この件については、OB会からの通信物は全体の親睦を図るために発送されており、1対1の通信のために労力を割いているものではありません。自分で切手を貼ったにしても、配慮していただきたいと思います。

知っている方の消息はもちろん楽しいし、年上のOBに対しては、それなりに学ぶべきものがあり、年下のOBに対してはそんな頃もあったなと思ったり、世代の違いを感じながらも同じ金大ワングルOBの歩みとして、通信はたいへん楽しいものです。

一つの波紋は、また次の波紋として広がり、交流のきっかけとなっていきます。1対1で他はシャットアウトの傾向が、今後広がるようであれば困りますので、あえて苦言とします。

OB会の発足にあたり、細かいルールを決めている訳ではなく、些細なことの中に認識の違いといったものも生じてきます。通信の扱いについては、上記のようにご理解いただき、年に2回の交流の場にご協力下さい。

遭難対策---

ビーコン及びアマ無線、社団に関して

2月中旬、春合宿CLの柴田さんから電話。「懇親会の時にはああ言ったのだけど、もし、もらえるんだったら、ビーコン（無線発信機）が欲しいと相談し合ったのですが…。」

彼等も正月4日に宝剣を目指し、別の登山口において雪崩遭難を耳にし、びびって引き返してきたとのこと。「1台が4万円する輸入商品で、これまで無しでやってきたと言え言えなくもないんですが、CLとSLとPLとさしあたり5台があれば安心できると…」ということでした。

他のOB会役員に知らせる前に、コージツ高尾店に勤める35期OB吉田さんに問い合わせしてみました。すると、

「在庫は一切無し。今シーズンはもう間に合わず、今注文してもらえれば来シーズンの冬には間に合わせられます。値引きについては就職1年目ですし、輸入商品なのでどうにもできません。」という返事でした。

そこで、この返事を早速柴田さんに伝え、トランシーバーについてはどうなっているのかを聞いてみました。すると

「学生課の物は性能が悪く、顔の見える距離でしか通話できない代物なので、今は借りていません。自分と、3回生の山本と1回生に一人アマ無線（つまり、無線免許と無線機）を持っているのがいて、今回はその3人を3パーティーに分散して対応します。来年は僕ら二人が抜けることになるんで、新3回生に対策を考えてもらうしかないですね。申し送りはしておきます。」との返事でした。

ここでアマ無線について簡単に紹介します。（事務局長は4級、その夫2級所有。無線局も開設しているので、多少知識有り。）

法規と無線工学の試験に合格した者は、無線従事者免許証の交付を受け、さらに申請して、

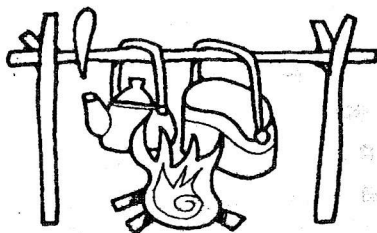
アマチュア局を開設します。アマチュア局というのはいわゆる1台の無線機に相当し、これに登録シールを貼ります。この無線機を他人が使用したり、また譲渡することはできません。

したがって、もしワンゲルの現役に無線機を寄付したとしても、備品として使い回すことは不可能です。

こんな場合のためには社団を開設する方法があります。社団が所有する無線機として登録すれば、社団のメンバーの中で無線機を使い回すことが可能になります。そのためには、目的・名称・事務所・資産・理事の任免及び社員の資格の得喪に関する事項を明示した定款を作成したり、代表者を選任して、社団局の免許を受ける必要があります。…という小難しそうですが、「社団」とは二人からを意味し、家族で無線機を共同使用している場合もこれにあたります。

この「社団」をワンゲルに適用するとすれば無線免許を持つOBが理事となり、現役には無線免許を取ってもらい社員として登録する。この社員登録を適宜更新するようにすれば、無線機を部が保有し、使い回すことができます。

現役には以上の情報（ビーコンの入手には時間がかかること、無線機所有には社団を作る方法があり、もしそれを希望するのであれば協力すること）を伝え、春山合宿中にでも話し合ってみよう依頼。一方OB会役員にも以上の経緯を役員会通信NO. 12の記事として送り、さしあたりの意見としてどう考えるか？要望されたビーコンについては、機種・台数・保管についてどう考えるか？を問い合わせしてみました。



梶「ビーコン・アマ無線の件については、社団のことがよくわからないものの、やはり多目的に使えるなど、アマ無線の方がいいように思います。なお、私も免許を取らねば…と前から思っており、御協力することに異存はありません」

椿川「ビーコンについて…

- ・機種は吉田さんに任せればよいのではないか。
- ・台数は予算との兼ね合いもありますが、現役のいう5台程度がよいのではないか。
- ・OB会保管では現役が借りにくくなってよくないと思う。保管の責任者を決めて、現役管理がよいと思う。

アマ無線について…

ビーコンと無線機を選択については、まず現役の意見を聞いたらいいのではないか。無線機の場合、OB会の社団はいろんな面で重荷にならないか。」

高木「社団設立が容易にできるのなら舟田さんの考えた案でいいと思います。ビーコンとの兼ね合いは、金銭的なものを考慮して台数などを決めればよいかと思います。ビーコンは高価な物だし、現役とのつながりという利点もあるので、OB会が保有するという形が良いのではないのでしょうか。貸し出し時に、いろいろ状況を聞くこともできるし…。ただ現実的に誰が保管するのか（その人の負担が心配）この点がクリアできれば良いのですが。」

坂尻「登山者本人が行方不明、あるいは意識不明などの場合、その所在を発信する電波で知らせるビーコンは確かに魅力的ですが、雪崩などに遭遇することなどを除いては、あまり意味のあるものと思えないし、全員に持たせるとしたら、何台になるか？冬・春合宿も少数のパーティーで動いているなら、まず数台の購入からとも考えられますが…。

それよりもアマ無線社団局の方がベターかと思います。無線の方が送れる情報が多く、持ち歩く際の負担より楽しみの方が多いように思うし、部員あるいはリーダーの要件とし

て、無線免許取得があって良い。そのことで、遭難対策を現役自身、身近に考えることにもなるのではないか。

高校の山岳部は一般に顧問が同行するパーティー行動を行うので、大会などでは、各顧問が保有するアマ無線が通信手段になっていました。」



4月7日柴田さんから電話あり。「今日、新3M（3年ミーティング）が開催されており、どうするのかについては、彼等の報告を待って下さい。春山は、アマ無線を持つ1年生が風邪で不参加となり、自分のと山本のと2台だけで連絡を行いました。今年から無線保持者がいなくなるが、どうするかは彼等の決めることで…。春山は事故がなくてホッとしました。いろいろ御心配をおかけしましたが、そういうことで、ありがとうございました。」

そこで、数日後、こちらから新主将に問い合わせてみました。

「ビーコン？ああ、あれはいらんだろうになりました。無線？あれもいらんだろうになりました。」

といった経過で、役員の意見をまとめる必要もなくなって、落着！

しかし、ここで事務局長は考えます。時間空間とも同じ山行をしていても、連れていってもらう立場と、連れていく立場では、大違いなのだ。他人の命を預かる怖さを知らねば、まだ一人前じゃないよ…と老婆心はつぶやきます。無線機が無用の長物ですんだのなら、それはそれで、たいへん結構な事なのであり、イコール無駄とはいえません。

今回の「相談してみるように」と言ったのは、3年生が、執行部になりたてホヤホヤの時期でした。もし、彼等が、雪山を前にして「やはり

何らかの無線機器があった方が…」という意見を持つようなら、また今回のようなことをくり返していくべきではない。1年限りの執行部ゆえに出てくるマイナス面といえる部分に対しては、OB会が助言し、より安全な山行に近づけるよう、遭難対策として考えていきたいと思っています。

(尚、事務局長は、昨夏、犀滝の帰りの谷合いで、仲間が携帯電話で金沢の女房に連絡している場面に遭遇しました。なるほど、これなら免許もいらん。話す相手の免許もいらん。いるのは維持のお金だけ…。価格破壊が進んでいけば、案外、携帯電話の方が当たり前の時代になるのかも…とも思う次第です。)



電車から見た甲斐駒 21期 竹中 敏

9 4 冬号の返信

3月末までの返信分を期別に掲載します。期日が未決定ながら40名近い方から、参加のお返事をいただき、心強く試案にとり組むことができました。

(あれから、阪神大震災、地下鉄サリン事件などが起き、影響を受けられた方もおいでます。「月見の宴」につきましては、今回同封の返信葉書が正式申し込みとなります。)

○…参加

?…できれば参加したい

×…参加できそうにない



*顧問 前田 達男 ○

白山日帰り足慣らし、湯保→水晶→笠の3泊4日、剣道山行(遅まきながら現場確認)で夏はまあまあながら、その他の季節はほぼ全滅。冬合宿(荒島)も遅参・早帰り。

95年は教養・教育学部改組に連動して諸会議と「作文」に追われそうですが、山靴には淋しい思いをさせたくないと思っています。

*1期 仙田 厚太郎 ○

大変素晴らしいOB会報本当に有り難うございました。皆様のご苦勞に心から感謝申し上げます。

山は登るものでなくて、眺めるものになって久しくなりました。気持ちはあるのですが…。秋の会合楽しみにしたいと思っています。

会員各位の益々のご活躍を祈念しています。

*3期 田村 昭夫 ○

会報2号、一気に読ませていただきました。大島会長の挨拶、舟田女帝の文、達磨さんの「夫の遭難」etc…ワッゲル精神の不滅を垣間見る思いでした。

「月見の宴」には万難を排して参加します。

*3期 池本 和彦 ○?

毎日毎日仕事に追われ、ただただ白山を眺めているだけです。体重も増えてしまい山歩きも出来ないかもしれませんが、せめてベルクハイム周辺まで…。

*3期 岩井 修 ○

もう定年になりました。だから好きな事が出来ます。山に行く事も出来ます。ひたすらに歩く事の楽しさに又もどりたいと思います。

化石となったワンゲルの頃の山靴に油をつけました。

*5期 山田 允 ×

会報2号ありがとうございます。舟田事務局長のご苦勞に感謝します。当方4月には転勤(単身赴任)が予想されます。

*5期 龜田 武 ×

OB会役員の方々にはたいへんお手数をおかけしています。

*6期 大崎 進 ?

わずかの確率で参加できるかもしれません。御面倒ですが、日程が決定したら知らせて下さい。



*7期 村田 泰江 ○

この夏は19年ぶりに白山に登りました。あまり変わっていないのでほっとしました。その後、立山(浄土)、上高地は仲間が穂高に登るのを横目に、横尾まで、と久々に山に復帰した夏でした。往きはよいよい…帰宅後の筋肉痛のひどさと云ったら…。

*7期 四十万 利之 ×

拝復 寒さ厳しきおりから、皆様にはますますご健勝のほどお喜び申し上げます。秋の「月見の宴」のお誘いですが、夏期の夏休みであれば参加は出来ると思いますが、秋期は申し訳ありませんが可能性は少ないと考えております。私一人退きますが、皆さんによりしくお伝え下さい。

幹事の方にはご迷惑をおかけし、大変申し訳ないのですがあしからずお許し下さい。

*8期 榊原 恒昭 ×

部室はどこですか、馬術部の隣、坂の途中でですか。金沢へは時折出張しますが、少しずつ変化し、38豪雪時と比し、町全体が明るくなったような気がします。しかし他から来た者が、知ってもらうのに時間が掛かり、その代わり、知ってもらったら徹底的に良くしてもらった学生時代の雰囲気は、今もそうであってほしいな、という思いがあります。(因みに小生愛知県出身)

会報2号は、厳しいサラリーマン生活をし30年近くになっている者にとって、学生時代の自由な、拘束なしの時がなつかしく、学生時代は良かったなと思われる一時を味わわせてもらいました。ありがとうございます。

*8期 篠島 益夫 ○

H6年12月より広島へ単身赴任です。金沢大学も金沢城内を去り、広島大学も東広島へほぼ移転完了です。時代の流れでしょう。

それだけに想い出のベルクハイムの修復は感慨ある事件でした。現役の皆さん、ご苦勞様でした。

*8期 穴田 昭一 ○?

懐かしのベルクハイムが「復活」したとなれば、建設時に肉体労働を提供した一人として、是非参加したい思いはあるのですが、いつになるでしょうか。決まったら連絡下さい。

やまざと2号ありがとう。なつかしく読ませてもらっております。

*8期 柳川 徹 ×

最近山歩きを(30年ぶりにて初心者です)始めました。丹沢系を中心に徘徊しています。四季折々の山を歩くにつけ、学生時代の、その季節の山々が頭の中を駆けめぐります。体力、技術力がつけば、昔訪問した山々へアタックしたいと思います。医王山、白山、立山等なつかしい山々へ是非機会があれば…。

*9期 平村 耕作 ○

OB会役員の皆様、本当にご苦勞様です。「やまざと」楽しく読ませて戴きました。BHには20年以上行っていません。山小屋建設・整備のことを楽しく思い出します。秋の「月見の宴」を楽しみにしています。

*9期 白井 勇 ○

・会報ご送付いただきありがとうございます。
無理をせずのんびりやって下さい。

・兵庫県南部地震。在住のOB諸兄の安否が気懸りですね。

・倉谷BH行き、楽しみにしています。

・H5. 10から(社)中部経済連合会へ出向しています。



*9期 清水 一 ×

2月中旬に、娘達とガーラ湯沢へ日帰りでスキーに行ってきました。当日は雪で、山々を見ることはできませんでしたが、ワンゲルの合宿で学んだスキー術を思い出しながらスキーを楽しんできました。

*10期 山知 亮 ○

山行は出来ませんが、BHには是非行きたいと思います。

*11期 小山 清 ○

会報やまざと2号に感動しました。よくぞこれだけの記事を集め、編集し、印刷されたと！1121矢崎氏の住所変更をお願いします。

*11期 森川 功 ×

11期窪田氏の住所を連絡します。

OB会報2号ありがとう。でも、これを長く続けていくなら、OB通信の葉書は書いてすぐ出せるような配慮をしてほしいですね。(これも会費を払わないOBが多いからかな?)

*11期 矢崎 利哉 ×

犀川のほとり(室生犀屋の碑近く)に下宿していた者には未だ倉谷部落の面影があった、上流のベルクハイムには一段の思い出深いものがあります。春・夏・秋・冬、皆の顔、カメムシ、マムシ。現役ガンバレ！！

*13期 柴田 茂樹・訓子 ○

「やまざと」を読んでいると年賀状がしたためられず、年賀状をものしていると「やまざと」が読めません。困ったことです。

*13期 辰野 隆義 ○

13期生は去年より、秋に一泊の小旅行をすることになり、去年は10人、今年は9人の出席者で旧交を温めています。ほとんどが石川県と愛知県に集中しているため、このような行事が可能なのだと思います。

また、石川県在住者は毎年1月3日、夫婦連れて新年会を行っています。(13期近況報告)

OB会役員並びに事務局の方々御苦勞様です。

*13期 神林 博 ?

もし、日本にいたら参加します。

山小屋には13期我々にとって不幸な出来事が心に残っています。是非風化させないで教訓にしてほしいと願います。

*13期 吉田 穂積 ○

*14期 伊藤 直和 ×

スキーがしたくて、毎年雪山を眺め、計画を立て、それをつぶしています。

*15期 松林 知一 ○

子供たちも連れて行ってやれるといいのですが。なんとかか参加したいと思います。その時はどうぞよろしく。

「やまざと」をありがとうございます。近くにいなながら何のお役にも立たず、申し訳なく思

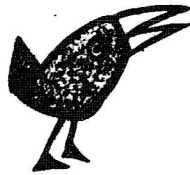
っています。事務局長のゲキ文に啓発され、来年からできればワンデリング（私の場合は主にロードですか）を再開したいと思っていますが…。

*15期 祖父江 直久 ×

*15期 宇野 潔 17期 宇野 和子 ×

「月々に神戸の月も良いけれど
倉谷の月は我青春の月」

- ・参加したいが、きっと行けないでしょう。
- ・オロロとカメと留年（私はしていない）とベルクハイムに想い出多し。
- ・竹内君は行くのかなあー。
- ・亡き友桂君に合掌。



*15期 上馬 康生 ○

1992年6月 奥池一奈良岳（大笠山往復）→高三郎山→倉谷。1994年5月犀川ダムから新道→高三郎→旧道で歩いてきました。新道の上部及び高三郎ー見越山間はブッシュがひどく、苦勞しました。

BHで懐かしい顔に会えることを楽しみにしています。

*15期 佐野 哲雄 ○

（白紙。編者ひとこと…昔から「沈黙は金メッキ」を信条とするお方でした。）

*15期 横井 昭次 ×

倉谷に入って、ベルクハイムに1週間でも、1か月でも、こもっていたいと思う毎日です。水の音と、鳥の鳴き声と、山の空気があれば、それで全てが充足した感のあるーそんな時を過ごすことのできた場所ですネ。

だんだん思い出の中に閉じこめてしまうようで寂しいのですが、参加できそうにありません。有意義で、新たな思い出になりそうな企画を考えて下さった幹事の皆様に感謝しつつ、お詫び申しあげます。

*15期 舟田 節子 ○

「私、もう一晩泊まっていくから」と言ったら、祖父江さんも塚本さんもびっくりしてしまった。でも彼等は私の意志を尊重し、（後できくと彼氏が来るんだ…）と思ったのかどうか、BHを去っていった。それは3年生になったばかりの春の小屋開きのこと。女子用の春山準合宿がボツになり、もう何も考えたくなくて、先輩のかつての「山小屋に一人で泊ってみろ」のその言葉だけに専心し、実行したのだった。努力も、能力も「オンナ」というだけで差別を受ける、その理不尽さにガマンがならなかった。

でもあの一晚、怖かったのはヘビでもクマでもなかった。誰か得体の知れない人間が現れるかもしれないことの方がずっと怖かった。（しかし何ですね。襲ってほしい頃には、襲ってもらえなくなるんですよ…ホント、ワンゲルに関わると、言うことに品がなくなります。）

翌朝、通り抜けた廃屋の中で釣人がガサッと動いた時には、ギネスものに跳び上がってしまった。必死にあとから仲間が来るような素振りをして、来る時よりもっとみじめな思いを抱えて帰った私…あれが一番の小屋の思い出。

あの頃、「留年したぁ!」「失恋したぁ!」と言っては、BHに籠もった部員がよくいたっけ。楽しい時だけでなく、辛い時もBHは迎えてくれたものでした。

*16期 北川 隆次 ○

*18期 椿川 利弘 ○

紅葉の中での大宴会楽しみにしています。

*18期 田辺 隆一 ×

海外遠征に精出しています。夏期には、立山剣沢の診療所に毎週詰めています。

*18期 森 博彦 ×

*18期 坂井 尚登・尚美 ?

いろいろお世話ありがとうございます。会報を拝見して、幹事の方々の御苦勞を改めて感じました。何もお手伝いできずに申し訳ないと思うのですが、ベルクハイムの修復も、会報も、本当に楽しみに思います。

皆様が、形をかえて山と関わりながら御活躍の様子、まだまだパワーを感じ、まだ遅くないかなとも、改めて感じました。

*18期 藤森 忠夫 ○

9月下旬は小学校の運動会がありますが、都合がつけば参加したいと思っています。役員の皆様にはご苦勞をかけますが、よろしくお願いします。

先月の阪神大震災、被災されたOBの方がなかったか、心配しています。

会費納入遅れましたが、本日振込みます。

*21期 加藤 万里子 ×

*21期 岩田 次男 ?

OB会役員の皆さん、いつも御苦勞様です。「やまざと」を送っていただき、ありがとうございます。ベルクハイム修復完成おめでとうございます。昔ベルクハイムを利用したことを思い出すと、あの頃がなつかしく感じます。

小生は最近、愛知県内の低山をよく歩いて自然に親しんでおります。

日程がはっきりすれば参加できるかもしれません。連絡して下さい。

*21期 竹中 敏 ×

新トレの夜、ベルクハイムのまわりのテントの中で聞いた、トラツグミや、ホトトギスや、ヨタカの大合唱の音が、忘れられません。今でもあの夏鳥たちは、倉谷にやってくるのでしょうか。ぼくたちは、遠くから思い出だけです。

*21期 滝本 民夫 ×

*22期 安達 敦子 ×

*22期 森 恵利子 ○

卒業してから高三郎には3度出かけています。倉谷を通る度に「ここに私達のベルクハイムがあるよ。」が私の決まり文句でした。なつかしい時間に出会えるのを楽しみにしています。

*22期 黒崎 敏男 ×

事務局の方々にはお手数をおかけするのみでなかなか協力できず、申し訳なく思っています。子供も大きくなり暮らしも落ち着いてきたので、簡単なハイキング程度から活動を再開したいなと思うこの頃です。

*23期 辻 政孝 ×

*23期 興井 隆 ?

どちらとも今はわかりませんが…。5年程前、イワナ釣りでBHを訪ねましたが、とにかくひどかった…。期待しています。

*23期 広岡 謙一 ○?

来年はたぶん3年生の担任になると思うので、その時の状況によって参加、不参加が決まると思いますが、行きたいです。

*23期 石地 隆司 ?

*24期 坪井 陽典 ×

*24期 南 英治 ×

世話役ご苦勞様です。たいへん感謝しています。遅れてました(すっかり忘れていた)会費を、近日中に必ず払い込みます。許して下さい。



*24期 黒岩 達夫 ○

鳥越さん、OB会活動に骨を折られていたら、本当に骨を折ってしまったそうで、心よりお見舞い申し上げます。(もう完治したのでしょうか)

さて私こと昨年めでたく長男(岳史)が誕生し、そのうえ転勤で8月に故郷長野に運良く戻ることが出来ました。金沢も近くなりましたので、秋の山行には参加したいと思っておりますので、よろしくお願いします。

OB会役員幹事の活動に敬意を表するとともに、微力ながら支援を惜しまぬ所存です。

*25期 難波 利行 26期 難波 清芽 ×

・配送物はいつもありがたく読ませて頂いております。うちでは金沢に足を向けて寝ていません。

・昨年('94)5月、残雪の奈良岳へ登りました。懐深い、手つかずのブナ林は金沢の誇りであり、日本の宝です。離れてなおいっそうその素晴らしさには感動。

・昨年('94)10月、秋の光岳へ行きました。長年のあこがれであった南アの最深部も、今では天竜川側、遠山川から入れる1泊2日の手軽な山になってしまいました。日本庭園のような、ほのぼのした実に風情のある山でした。

*25期 石本 一鶴 ?

スリランカは中止になり、2-7月は中米のエルサルバドルへ行くことになりそうです。私の仕事は、ODAをインフラストラクチャという形に変えることです。外国人との付き合いはおもしろいですよ。ちなみにエルサルのはネパールかな。南アフリカのジンバブエかも…。こんな調子です。

*25期 荒戸 美雅 ×

山の天気のように、僕達をとりまいている環境はめまぐるしく動き、あふれる情報の処理にウロウロする毎日です。

広告業界に身をおいたサガかもしれませんが、毎日歩きながら考え続けています。もちろん背中には、妻・子供の入ったザックをしょっています。

*26期 益川 珠美代 ×

住所を変更しました。('94.11)

会報2号は転送され、手元に(たしかに)いただきました。

*26期 赤堀 鉦仁 ×

ベルクハイムと言えば、カメ虫とオロロと、すずめ蜂にさされたヤツのことを思い出しました。

*27期 二木 博子 ×

1994年11月23日に結婚の予定です。披露宴には同期の外村さん塚原さんも来ます。残念ながら、相手は山登りをあまり好きな人ではないので、しばらく山はおあずけになりそうです。

*29期 森 宏人 ○

昨年11月、転勤で福岡より大阪へ出てまいりました。今年は中央の山へどしどし登りに行く予定です。お近くの方、連絡下さい。

幹事ご苦労様です。

*29期 堀川 隆司 ×

*29期 小杉 昭夫 ×

返事が遅くなりすみませんでした。勤務先の訂正をお願いします。

*29期 高木 美保 北村 智明 ○

できるだけ参加したいと思っています。よろしくお願いします。

*30期 野田 和裕 ○

楽しみにしています。



*34期 奥 民昭

○

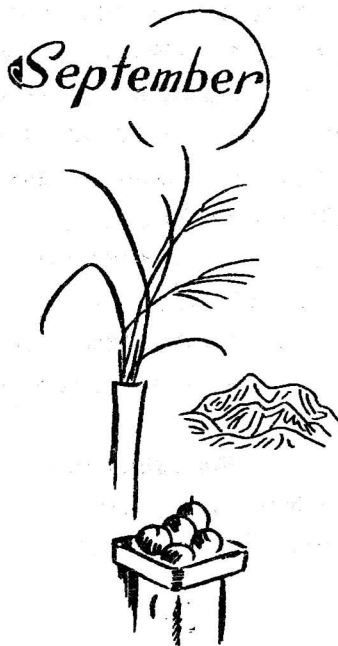
去年の夏は仕事で忙しく、休日もほとんどない状況だったので、山は1回しか行っていませんが、今年はできる限り行きたいと思っています。就職して最近思うのは、山とか自然のありがたさです。毎日コンクリートの壁の中でディスプレイに向かって仕事をしていると、家の周りの田んぼ道を歩く事にさえ、心が安らぐ今日この頃です。

*34期 松浦 真也

○

連絡が遅くなってまことに申し訳ございません。上記の「月見の宴」についてですが、今のところ参加したいと思っております。しかし、ご存じのように、阪神大震災の影響があり、今年の4月から明石市役所に就職するものですから、その頃休みがとれるかどうか、今はまだわかりません。現に今もアルバイトでかきだされており、避難所に食事を配る仕事をしております。(15期の金井先輩ともお会いしました)

そういうことですので、今はとりあえず、参加にしておいて下さい。お願いします。



卒業一言

OB会の立場からは、「入会一言」といった所ですが、部誌が発刊されていないことから、従来どおりの「卒業一言」でお願いしました。35周年、山小屋の修復と、実によく活動した36期連も、ついに卒業、OBに昇格しました。

*石川 明弘 理学部大学院

金沢大学入学から4年がたち、私の場合は同大学院へ進学ということで、あと2年居座ることになります。気がつけば23歳、外面だけはいいおやじ。しかし内面はまだまだガキでアホなことばかりやっています。学生時代はワンゲルと学部の2本柱でどちらも居心地はよく、山へ登りつつ物理を楽しみながら、やはりアホなことをやりつつ残りの2年の学生生活を送っていたと思います。

ワンゲルへ入部した時の頃の写真を今見てみると、少し顔のつくりも爺臭くなったかなと思い、何も考えずただ先輩についていった頃の自分を思い返せます。昔と今では雰囲気が違うという人がいるけれど、本当にそうなのかなと私は思います。

これまでの山行で一番印象に残っているのは白馬→親不知で、海で泳いだ時のあの感動は結構ビリビリ痺れたのを思い出します。

残りの2年でこれを越えるPWを現役の皆さんに出してもらって、体力の続く限りついて行き(体力がなくなっても歩かなあかんちゅーに!)再びビリビリ痺れてみたいです。

ではまた部室でお会いしましょう。

*金井 一人 工学部大学院

ワンゲルに入部して4年が過ぎた。この大学の4年間はワンゲルを中心にした生活を送ったように感じる。

今でこそ、ワンゲルにどっぷりはまってしまうが、こんな自分でも、これまで辛くて部を辞めようと思ったことが何度かあった。し

かし、その度ごとに「つらい時こそ、自分から逃げるのではなく、それを乗り越えることが重要だ」と自分に言い聞かせては、辛い時を乗り越えてきた。

これから先、自分の人生に何が起こるかわからないが、ワンゲルを通して得た経験がきっと役に立つ時が来ると思う。

4年間お世話になった皆さん。どうもありがとうございました。

*新倉 崇之 通商産業省

就職の面接で「大学時代何をしてきたか」と聞かれ、待ってましたとばかりワンゲルのことを延々話したら、「それ以外は?」と聞かれ、少し返答に困ったことがある。

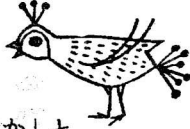
事実、ワンゲルの占めるウェイトは大きかった。ワンゲルから多くのことを学んだが、山の生活や技術以外のこともたくさん教わった。特に自分の場合、多くの失敗を重ねたが、それを指摘してくれる人や、グチを聞いてくれる人が存在したことが、自分にとって大きくプラスに働いていたと思う。卒業するにあたって、そのような仲間に出会えたことを、改めて素晴らしいと思うと同時に、「有り難う」と感謝したい。

これから社会に出ていく自分にとって、重要なのは、ワンゲルで得たことを日々の仕事や生活にどう生かすかであり、その点では、まだ始まったばかりなのだという事を肝に銘じて、私の卒業に際しての決意としたい。

*立川 健吾 三菱重工業

金沢へ来て4年が経ち、再び違った街へ行くことになりました。金大、そして我らがワンゲルも卒業します。今更ながら「光陰矢の如し」というお馴染みの言葉が脳裏をよぎります。

僕にとってワンゲルは全く新しい視野を提供してくれた存在でした。1年生の時に初めて樹林限界を越え、普段自分が当たり前のように暮らしている世界とは全く異なった空間が存在することを思い知らされた時のことは、未だに強く印象に残っています。



時には、気力・体力の限界を越えるような山行もありました。しかし、楽しかった山行と共に、そのような辛い山行も、想い出となってしまえば、貴重な自分の財産となってしまうのが不思議です。(つくづく人間の心というのは、いい加減、かつ便利である。)

先輩、後輩、そして同期の仲間達。皆さん今までどうもありがとうございました。これからは社会人としての修行をしながら、さらに自分の視野を広げるための旅をしていきたいと思えます。

みなさん、今までどうもありがとう。また山で会いましょう。

*朝日 秀樹 医学部在学中

「どうしてワンゲルに入ったのか」と聞かれたら、私は迷わず答えるだろう。「山が好きだったからだ」と。そんな答えしか僕には思いつかない。

実際、山に登って何が一番心に残っているかと考えてみると、雲海に沈む夕日を眺めた時や、薄暗い木立の中を木々の間から差し込んでくる光を見上げながら歩いた時、白い静寂が包む森の中を、雪を踏みしめつつ歩いた時などである。こうした自然の中に自分が置かれることで僕は、言葉には言い様のない感動を覚えた。自分がこの世界の中では、ほんとに小さな存在にしかすぎない事を知った。小さいながらも、自分はこの両足を大地に据えて存在し、見、考え、行動し、すべてを受け入れることができると感じた。

少々大袈裟な表現だったかもしれないが、山を通して僕が得ることができた物は、それほど今の自分に大きく影響している。これからも僕は山に登っていきたい。

最後に、けっして模範的な部員ではなかった自分に、4年間付き合ってくれたすべてのワンゲルの人に感謝したい。本当に4年間ありがとうございました。

*田中 充 工学部在学中

ワングルの現役生活は4年と短い。

体力にまかせて登り、食うことを最大の楽しみとし、酒を飲み、屁をこいて寝るだけの1回生。一通りの山行を経験し、もっと体力のいる山、難しい山へといちびっていた2回生。付いて行く山行と、連れて行く山行のギャップに苦しんだ3回生。審議の本当の大変さを知ったのと、自分の山行とカヌーを楽しめた4回生。であった。

ワングルのOB生活は長い。他のスポーツと比べ、登山は長く現役でいられるし、年相応の楽しみ方もできそう。5年に一度だけの記念山行だけではさみしいので、OB活動が活発になり、PWみたいな山行をOB間でしてみたい。

僕は追コンでワングラー部を卒業させられたが、学校は工学部を卒業させてくれなかった。だからO氏の様に、閣部員として、あと一年活躍するつもりです。



*沢田 哲之 工学部在学中

ワングラーには、2種類の人々がいる。＜山をこよなく愛する＞人々と、＜そうでない＞人々だ。話の都合上、今後前者をA群、後者をB群とすることにしよう。別に2種類に分けても、互いに対立しているわけではない。あくまで、分類上の話だ。

ただ、やはりこの分類の定義づけでは、多少語弊があるので、B群は改めて、＜山はどちらかというが好きだが、つらかったり、寒かったり、汚かったり、そんなのばっかりの山はやだし、ましてこよなくとか愛するなんて言葉はねー＞の人々ということにしよう。

私はどっちかという、B群であると考えて。「どっちかという」の下に点々をつけておかないと、先程の新しい定義づけと全く同じ気持ちと思われてしまいかねない。あくまで、そういった分類上にくる人々の意見の集約を自分なりに考えてみた結果（長いな…）である。

別に、今からワングルの批判をしようとか、ワングルとは…といった、小難しい話を論じようというわけではない。

そのB群出身(?)という立場から、卒業してみても思う、わたしのワングル観を今から述べてみようと思うのである（えらく、ここまで長かったナア。）

つづく

*樫村 美智子 文学部大学院

運動オンチな上、全身の筋肉含有量が限りなく0に近い私にとって、山登りというのは全く未知の世界でした。

秋に入部して初めて参加した冬合宿は雪がありませんでした。その頃はまだ硬派な雰囲気があったよっていただけか、途中入部だったからか、女一人だったからか、春になるまではほとんどの人と挨拶以上の会話をしたこともありませんでした。今思うとよくぞ辞めずにいたなあと我ながら感心するぐらいです。

めでたく、いつのまにかヒマさえあればPWに参加するようになり、ない体力はまわりの皆さんに甘やかされることで補い、楽しいワングル生活を送れました。甘やかして下さったセンパイ方、それを後悔したであろう同期の皆さん、それで迷惑を受けたであろう後輩の皆さん、どうもいろいろありがとうございました。つくづく幸せ者だと思っています。ということで、これからもお願いします。

*清水 勇一 新日本法規出版

ワングル3年間（4年間）の活動は私にとって非常に意義深いものでした。

体力、忍耐力、精神力がついたのはもちろん、そのほかに交流の場として先輩、後輩、そして同級生と良き人間関係をつくり上げることができたと思います。

今後私は社会という荒波の中へと立ち向かっていくわけですが、このような経験は必ず役に立つと思います。

皆さん、長い間ありがとうございました。

緑のダイヤモンド計画

白山国立公園を整備

環境庁は五日までに、日算に二億四千五百万円を計本の代表的な景観を保全する同庁の新規事業「緑のダイヤモンド計画」の整備箇所、石川県の白山国立公園の白山地域を決めた。七年度から五年計画で高山植物などの自然環境の復元、自然体験の場の整備などが行われる。

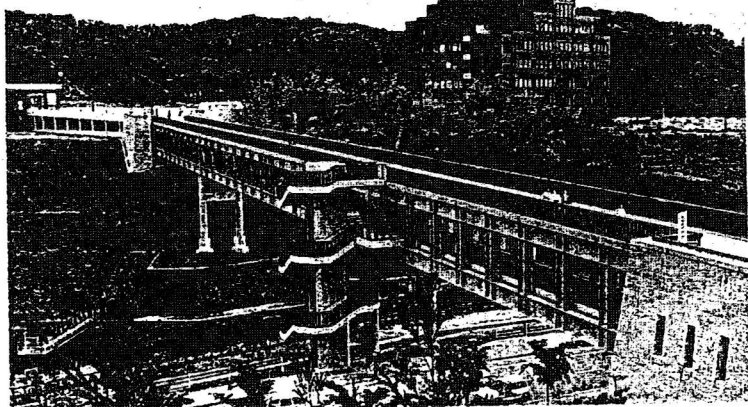
緑のダイヤモンド計画は、国と県が国立・国定公園の核となる地域で自然を保全、復元しながら、学習や探勝ができるようにする。

石川県は、この計画に伴う事業費として七年度当初予算見込まれている。緑のダイヤモンド計画の整備箇所には本年度、白山のほか、長野県の上高地が指定された。

環境庁

キャンパス結ぶ「アカンサスインターフェイス」

「アカンサス インターフェイス」と名前が決まった金沢大学キャンパスの連絡橋＝金沢市角間町で



きょう金沢大1期移転完成記念式

巨大連絡橋の命名・通行式も

決める。記念式典後に命名。アカンサスは同大の校章にデザインされているゆ

金沢市丸の内城内キャンパスからの移転事業で、角間キャンパスには文、教育、法、経済、理系学部という言葉と組み合わせ命名

付属図書館、大学会館、国際交流会館、本部棟などができた。昭和五十九年十月の起工式から数えて十年余り、ことし二月に最後まで城内に残っていた本部が引

金沢大学の金沢市角間地区の総合移転・第一期計画の記念式典が、同日、角間キャンパスである。大学の新しいシンボルとなる、キャンパス内の長さ三千六百メートルの道を挟んで南北の連絡橋は学内公募して「アカンサスインターフェイス」と名付けることを

金沢大学の金沢市角間地区の総合移転・第一期計画の記念式典が、同日、角間キャンパスである。大学の新しいシンボルとなる、キャンパス内の長さ三千六百メートルの道を挟んで南北の連絡橋は学内公募して「アカンサスインターフェイス」と名付けることを

蒲原君を偲んで

36期のみなさんは仲間でテントを購入し、今後8月下旬の追悼山行を続けていくそうです。連絡先は石川明弘さんになっています。

* 石川 明弘

蒲原との写真を見返してみると、私と彼と朝日と立川が岩をかかえているものがある。これは、倉谷へ岩魚を釣りに行こうということで行ったのだが、全く釣れず、川で泳いだ時のものである。太陽が出ている時はポカポカ暖かいのだが、雲に隠れると急に寒くなり、皆温かい岩を抱えて温まっているのである。これはたしか2年の初めの頃だから一番ヒマな時で、遊びまくっていたような気がする。

フォルクスワーゲン・サンタナ号が運転されたのもこの頃で、金石港、湯涌温泉などエリアを広げて遊んだ。

名古屋へカヌーを買いに行こうと、蒲原と田中と新保さんで出掛けた。その帰り、皆疲れて眠たいのに、蒲原は運転している私を気づかって「俺一緒に起きててやるわ。」と言ってくれたのはうれしかったが、つまらないオチのない話がえええんと続き、倍くらい眠たくなったのを覚えている。

ワンゲル部院の中では蒲原とけっこう遊んだグループに入る。最近もし今ここに蒲原がいればこうなっているのかなと考える時がある。だいたいこんな感じだろうか…。

田中 いやーお前。ほんまバカボンに似とるわ。

石川 ほんま ほんま。

新倉 かわいそうやろうが。

蒲原 ありがとう新倉。そういつてくれるのはお前だけや。

田中 新倉、お前も少しは思っているやろが。

新倉 少しね。

蒲原 も一、みんなきらいだ。



* 蒲原君について 金井 一人

1年が終わり、2年の春頃に蒲原君とはまだ同じパーティーになったことがないのに気付いた。そのうち同じパーティーになれるだろうと思っていたが、結局同じパーティーで山に行くことはなかった。非常に残念に思う。一度でいいから一緒に山へ行きたかった。

また、蒲原君とは同じ工学部で同じ学科だった。そのためか、部(山)での印象より、学校の方の印象が強く、もし剣の事故が起きていなかったら、蒲原君だったら、どこの研究室を選び、卒業後の進路をどのようにしただろうと時々、今でも思う。

* ばくとカマハラ 新倉 崇之

「おはよう新倉、元気？」というのが彼の挨拶だった。その度に(なんだ、このなれなれしいやつは。男でしっかり朝の挨拶をし、しかも元気?なんて聞くのは外国人くらいだぞ)と思ったものだ。でもなぜか自分も今、真似しているが。

そうだ、やつはうちの同期の中では天然記念物的なやつだった。どこが、というと、彼はShyなワンゲラーではなくAggressiveなのだった。特にそう感じたのがうちの2年の新トレ。最終日の奥三方の林道終点からの下りの林道で。彼はずっと1年生の女の子としゃべっている。だがオレは一人時々ため息をつき、なぜか中島みゆきを口ずさみながら前へずんずん歩く。よくそれだけしゃべれるな、というくらいとうと

うとしゃべっていた。でも誰彼の区別なく平等に話かけることが彼の素晴らしいところだった。だからオレもまずは挨拶から、と真似し始めたのかもしれない。

このように彼のことを思い出すと、同時に自分に対する怒りや非力を感じる。彼との楽しかった思い出だけでなく、そういう感情も忘れてはならない。そういう点で、彼と自分との関係は永久に続く。

* 立川 健吾

僕に、生きることを楽しむ、そして常にそのための工夫をする、ということを教えてくれた蒲原 良太郎君と別れて2年半余り。これまでの自分の生活を振り返ってみると、何か蒲原君に対してすごく申し訳ない様な気がします。折角いいことを教えてもらったにもかかわらず、僕はそれを実践することなく、ただ周囲に流される様な生活をし、多くの可能性とチャンスを見すみずみ逃がしたのではないだろうか、と思います。

今ここに学生生活が終わりを告げることになりました。これまでのように、自分自身のための時間を持つのは、かなり大変になると思います。しかし、それだけに今後与えられた自由な時間は、最大限自分のために有意義に使わなければならない、という様にも感じています。同じ過ちは繰り返すまい、そう思います。

春から新たなスタートを切ります。気合を入れて――。

*蒲原 良太郎君について思う事 朝日 秀樹

もう既に事故が起きて2年以上過ぎてしまいました。しかし、山に登るたびに、昔の山行の写真や計画書を見るたびに蒲原君の事をはっきり思い出す事ができます。剣に登り、あの場所を通る時はいつでも、心の中で蒲原君に話しかけます。ワングルで最近あった事、自分が最近思っている事などを彼に話しかけます。もちろん彼は答えてはくれません。しかし、澄みわたる空の雲の切れ間から、連なる青い山々の向こ



うから、きっとあの人がつっこい笑顔を見せながら、彼はこちらを眺めていることでしょう。

僕は今、彼より2才年上になってしまいました。彼が生きることのできなかったこの時間を無駄にはしないと彼に誓って、僕は山を下りていきます。また来年、この山で会える事を願っています。

* 田中 充

ワングル四年間の思い出の半分は、カマハラの剣での事故死だ。

僕はワングルに入部する前から、友人や家族と山にはよく登ったし、テント生活も楽しんでいた。ハイキング程度だが雪山にも何回か行っていた。そんな僕がワングルに入った事でできた初体験が熊野川PWでカヌーに乗せてもらったことだ。初めてカヌーに乗った時の、なんともいえない浮遊感と、ゴムボートにはない自由さと、カヌーとの一体感はたまらないものがあった。

この川下りPWに誘ってくれて、共にこの体験をしたのがカマハラで、僕は、この体験と、一冊の本（日本の川を旅する 野田知祐著）に感化されて、次の春にはカヌーを買うまでになり、事故がなければ2人で千曲川に行くはずだった。

カマハラが死んだ後、カマハラのカヌーは今部室の倉庫にあり、皆が使えるカヌーが一艇できて、カヌー初体験をした部員が多くできた。それにカマハラの御家族の方々とも親しくなれたし、追悼山行で毎年、みんなと顔を会わせる機会もできた。「だからおまえは、万年正月人間なんだよ」とカマハラに言われそうだが、思い出の半分の事故が辛い事ばかりでなく、いい事もあるんだと思えるようになってきた。

*今、蒲原に思うこと 沢田 哲之

あれから2年半。忽然と僕らの前から消えた彼について、私は初めて筆をとる。今、思うと悲しみよりはなつかしさが漂う。彼と行ったところ、語ったこと。昔のここのような、つい最

近の事のような…。

彼と、2年生の時、夏山について、特にパーティーについて二人で自分の家で話したことがあった。考えてみると、彼と互いに深く会話したのは初めてだったかもしれない。当時、一部の2年生の間では、夏山のパーティー分けに強い関心を抱いていて、私もその一人で、いろんな人と意見を交わして、その流れの一つだったように思う。そこで、蒲原という男を今までより少し深く知った気がした。

具体的に言葉で表現するのは難しいのでうまく書けないが、人間やっぱり一度深く話し合ってみてその人物を知れるのだということが判った。それまでは、たいして考えもない軽そうなやつと思っていたのだが、たかがパーティー分けだが、それなりに自分の考えを持っていた。やはり、うまく書けないが、とても印象に残っている事である。

* 樫村 美智子

私か秋に入部した時、遠巻きにこちらを窺う硬派な人達を尻目に、よく声をかけてくれたのが蒲原君でした。あの頃はまだ、なつかしのマッシュルームカットもどきの髪型で、両手を前にかざすという独特の話し方をしていました。

彼は世にいうく女らしい>という言葉で表現されるところの、感情表現の素直さや、ロマンティストな面を持っている反面、エールを切ったり気合を入れるというような硬派なことを愛するため、かなり愉快的なキャラクターでした。彼が住んでいたひまわり荘には、山の写真とか、拾ってきた棚やら、由緒正しき旧式炊飯器やらあって、タラコご飯か何かを食べさせてもらいながら「日本の夏だなー」と思ったものです。

あのツーリング自転車に乗って、にこにこしながら「かしむらー」とやって来る蒲原君は、なかなか愛すべきヤツでした。

* 蒲原 良太郎君へ 清水 勇一

あれからもう2年半も経ったのか…。でも俺はおまえのことを忘れてはいない。時々思い出

したりもする。

おまえとは同じ寮で部屋も近いということで仲が良かったなあ。毎日のようにおまえの部屋に遊びに行って、俺の寮生活の不満を聞いてくれたりもしたっけ。2人で石川の家へ遊びに行ったり、バイトも一緒にしたり…。

そう言えば夏合宿、一年の時も2年の時も一緒だった。けんかしてムカついたりしたこともあったけど、でも心の底では俺はおまえのことを尊敬していたんだ。人間的に俺よりも一回りも二回りも上だったのをよく分かっていてたから。

おまえが俺に対して最後にしゃべった言葉を昨日のこのように今でもはっきり覚えてる。2年の夏合宿の帰り、糸魚川方面へ向かう電車の同じボックス席に、俺とおまえと柴田が乗っていたっけ。俺が実家へ帰るので松本駅で別れる時、おまえは笑顔で「じゃあな」と言ってくれた。その言葉を今でもはっきりと、鮮明に覚えてる。

蒲原、短い間だったけれどありがとう。おまえに会えたことをとても感謝している。これからは社会人になれけど、きっとおまえのようないや、おまえ以上の立派な人間になってみせる。

いつまでも俺のことを見守っていてくれ。また剣で会おうな。

* カマハラ君の思い出 新道 聡美

私はいろんな所でカマハラ君を思い出す。

その1) ガムテープ

かずみちゃんがガムテープをビリビリと細かく裂いていたら、カマハラ君は「あ、手もずるしてる」と言っていた。それ以来、私のボキャブラリーに<手もずる>が加わった。

その2) 花の写真のテレホンカード

カマハラ君ちで電話を借りて、非常識にも長距離で話していたら、鬼のように怒られた。(後でお金を払おうと思っていたけど、ちゃんと) あんなに思いきり、あんなに正直に力一杯、家族以外に怒られたのは、初めてだった。少し涙が出た。花柄のテレホンカードをあげて許してもらった。

その3) うちのドナ

私のうちには<ドナ>という名前のアヒルが住んでいる。本名はドナルドダック君という。彼のびっくりポーズはカマハラ君によく似て、かずみちゃんと二人でよく笑った。

その4) 悪女

私は生まれて初めて<悪女>と呼ばれた。カマハラ君に。

その5) ワンゲル

私は2年生から部活に混ぜてもらった。みんなシャイなのか知らんけど、なかなか入りたては淋しく、なにくそと思う日々だった。白山に

行って一緒に夕焼けを見た時も、朝会ってニコニコにおはようと言ってくれた時も、私にとって、カマハラ君はなかなか大好きな人であった。

私は同期のみんなより、一年分、カマハラ君についての思い出は少ない。いっぱい一緒に笑ったり、怒ったりして、沢山仲良くなりたかった。

人の一生があんまりあっけなくなくてびっくりする。

どうしようもなくて本当にびっくりする。

おわり。



兵庫地区金大ワンゲルOB各位

春爛漫の金沢では、石川橋の付替工事で閉鎖されていた沈床園が2年ぶりに開放され、石垣に登る者、素っ裸で走り回る者と、相変わらずのお花見コンパ風景が繰り広げられていました。

さて、あの阪神大震災から4月余り。兵庫地区在住の金大ワンゲルOBの皆様はいかがお過ごしでしょうか？

信じ難い光景をテレビで見る度安否が気づかわれ、また、事務局へも問い合わせがあったり、我が期は全員無事の連絡をいただいたりもしました。具体的に何のお力にもなれない親睦会の立場ですぐお訊ねを出すのも、被災された方々にご無礼なような、郵便事務をますます混沌とさせるような気がして、只々一日でも早い復興を祈ってまいりました。

今も何のお力にもなれないことに変わりありません。それでも、あの先輩は？あいつは？と、直接電話する間柄でもないけれど安否を気づかっているOBが大勢います。せめて次号の会報の中で、皆様の消息をお伝えできればと思っております。一応原稿用紙（部室の残材の中から確保してきたもの）を同封しましたが、量についての制限はありません。5月末締切で送付いただけますようお願いします。

秋の「月見の宴」は、このような事態のため中止も考えましたが、何が起こるかわからないご時勢なのだからやれる時にはやっておこうで、実施の方向で動いています。年が明けてからの大震災、地下鉄サリン、続くオウム真理教、円高の話題でますます忘却のあなたにもなってしまう、返信もおぼつかない状態になってしまいましたが、今のところ40名の参加希望が届いています。次回会報中に、正式日程と、正式申し込みを入れます。もしご都合がつくようでしたら、参加を心からお待ちし便宜を計らせていただきたく思っております。

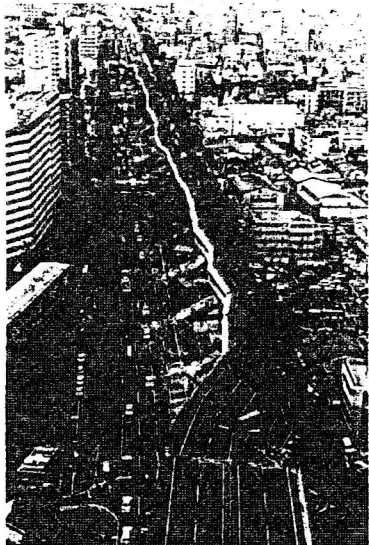
まだまだ余裕もなく、お疲れのこととも存じますが、一言なりともご返信いただけますよう重ねてお願い申し上げます。

阪神大震災! 死者5000人超

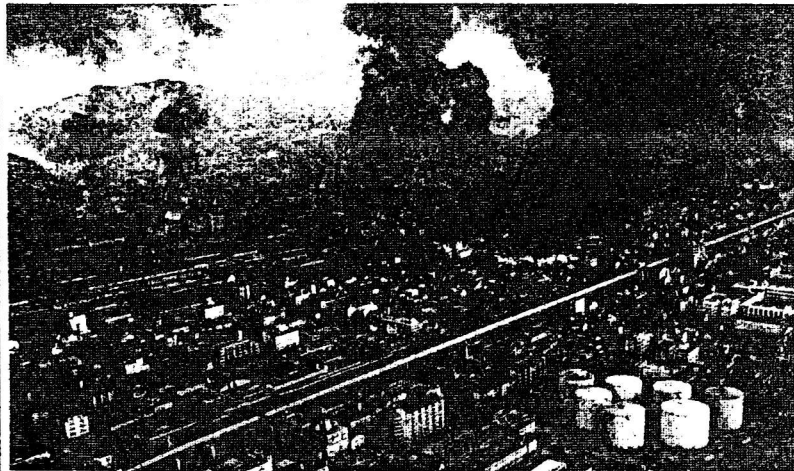
都市直下型震度7 神戸壊滅炎上

毎日ムック

「戦後50年」より

焼け野原となった
神戸市東灘区の市街
1/18 7時45分めくれあがるように横断した阪神高速道路
神戸市東灘区深江本町 1/17 11時25分

倒壊した阪神高速神戸線 神戸市東灘区深江 1/17 9時5分



大火が発生している神戸市須磨区 1/17 10時

1月17日午前5時46分 淡路島を震源とするM7.2直下型地震が起き、震度の神戸市の他、兵庫県、西宮、芦屋市、淡路島を中心に都市型震災による大災害に見舞われた。死者は、兵庫県が大半を占め、特に老人と子供の死者が際立ち、耐震技術神話で保証されていたはずの新幹線や高速道路、さらには、60年代以前の建物などが次々に倒壊し、交通通信

機関や水道・ガス・電話・電気のライフラインも壊滅し、神戸市内では各所で火災が発生、消防活動は断水など都市機能マヒで夜を徹して延焼し、巨額を超える焼野原となった。倒壊家は約10万戸超に及び30万人が避難生活を強いられた。橋脚が倒壊し線路がつる下った状態の山陽新幹線は復旧に2カ月以上かかる見通しで、また高速道路の復旧も本格的には数年かかると思われる。

建物の下敷きになった人びとの救出も、救援部隊が道路の大渋滞ではばまれないなど難航し、物資の運搬もままならず木・食糧不足となり、トイレも満杯、買い出し、行列も復活し、まさに戦後直後の状況になった。都市型大地震は1923年(大正12年)の関東大震災以来、日本は初めて高層ビル社会での都市震災を経験したことになった。地震源は活断層と呼ばれるプレートの間に蓄

積されたエネルギーによる断層のずれによるもので、関西は、1949年の南海地震以来大きな地震がなく、従来から関西は地震が少ないという油断が被害を拡大した。震度7という地震は、いさなりタテ振れからはじまって、強力なヨコ振れが続き突然家具が倒れるところからはじまるもので、夜明け前の熟睡中を襲われ、なすすべを知らず、ショック状態で身動きできぬまま圧死、ショック死、下敷きのまま焼死した人も多かったようだ。また、スイスが19日捜査と援助隊を、米英伊が専門家の派遣を、韓国仏独露など60カ国・地域が支援を申し入れるなど諸外国から援助の手がさしのべられた。この震災は本書の扱う45-94年を超えた95年に入つての災害だったが、この未曾有の都市機能の混乱と騒擾の中でなされた取材を、戦後50年後に東京など他の大都市に恐訓を贈(のこす)貴重な資料として後世に伝えることも重要な役割と思ひ、緊急増頁編集をした。そして、結局戦後50年の始まりと終わりは焼跡だった。



阪神高速道路が倒壊し、落ちそうになったバス 西宮市点検町 1/17 9時45分

1月17日朝5時43分、私は連休が明けて、勤務先の広島へ向かう為、新神戸6時15分発の新幹線に乗るべく自宅の駐車場へ出て車のスターターをグルグル回し始めた…その時である。ドカーンという音と共に、車の天井に放り上げられた。あとは車は私と妻を車内に置いたままボールのようにボンボン跳ね廻っている。

初めは車のエンジンが爆発したと思ったが、慌ててライトのスイッチを回すと、家も庭木もバサバサ揺れまくっている。それで私も妻も、これは地震だと悟った。

20秒もあったかなかったか、少し収まってきたので車から出て、停電で真っ暗な家に飛び込んで二階の部屋に居る娘達に大声をかけた。一人は直ぐに反応あり。もう一人はなし。先に返事をした長女に「確かめろ」と指示して、妻には家の中、私は家の外廻りを懐中電灯を持ちながらひとまわり。植木鉢や物置の中は全部ひっくり返っているが、家の基礎などは問題なさそう。家の中へ戻って、反応未確認の次女の様子を聞くと「まだ寝ているが、何ともない」という長女の返答…全く平和な性格だとひと安心。「家の中は？」と妻に聞くと、本棚から本が沢山飛び出して落ちているが、台所などはたいしたことはなさそうという。直ぐ携帯ラジオをつけたが、「強い地震がありました」というだけ。どこで地震が発生したのか、これも不明のまま。

取り敢えず、広島の職場の関係者に電話を入れて「今日は職場には戻れない可能性大」の旨連絡する…ここまでは地震発生から15分間の午前6時までの私のドタバタ劇である。

幸いにも須磨区北部のニュータウンに位置する我が家の震災は、このレベルで始まったのである。その後、電話は近い所ほど不通となり、現在の職場である広島との連絡がどうにか取れる程度。かつて自分が担当した神戸の営業所も門真中市の本社も連絡不能で、情報は携帯ラジオだけ。地元民放の歩いて集めた情報から、とんでもない被災状況である事を知り、10時頃か

ら、友人・知人の会社・自宅へ向かおうとしたが、道路は家を出て300mも行くと既に超渋滞で手が出ない…こんな状態で、翌朝までかけて数人の友人の安否を確認しただけで、18日は8時間かかって広島の職場へ復帰しました。

この未曾有の震災は、私の専門領域である「住まい」に関して、その安全面でいくつもの新しい要求をつきつけてくれる結果となり、「安全・健康住宅のあり方」に対して新しい答えを、ハード、ソフト、コストからチャレンジする大きなテーマを残してくれました。

皆さんには天災から身を守る当面の生活法について、私の経験からコピーを添付して終わらせていただきます。

平成7年5月14日 広島にて

震災(自然災害)から身を守る工夫

*住む場所

- ・都市計画に基づく住宅地に住む
(宅造レベル・空地率)
- ・川が近く、きつい傾斜地は避ける
- ・1981年以降(耐震法見直し後)の住宅を選ぶ



*生活

- ・近所付き合いの良さ(悪い人、地域貢献のない人は助けてもらえない)
- ・背の高い家具の持ち込みを避ける
- ・家具の転倒防止(クサビ、背バンド、L型金具)
- ・戸内車庫のある人は車を入れて置く
- ・ガス元栓のしめつけ
- ・風呂は使用後水をはっておく
- ・携帯TV、ラジオ、懐中電灯は枕元におく

*情報確保

- ・電話は諦める(無線式が良い)
- ・携帯TV、ラジオにはかならず電池を入れておく
- ・自転車、ミニバイクが良い

*備品(纏めて屋外収納庫で管理、アウトドア用品と一致)

- ・携帯TV、ラジオ、電灯

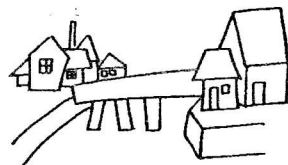
- ・携帯電源装置
- ・携帯コンロ、予備ガスボンベ
- ・寝袋、テント、クリーンポット
- ・レトルト、インスタント食品、ミネラルウォーター、調味料
- ・ナベ、カマ（飯盒、俎、コップ、スチック皿、コップ）

***車（非常用住居）**

- ・ミニバン、ピックアップワゴン、ジープワゴン

中では被害は少ない状況です。家屋の方は私自身が大工と左官をしながら、ぼちぼち補修しています。

OB会幹事の皆様いろいろ御苦労様です。お世話になりっぱなしですが、今後ともよろしく願います。 H7. 5. 20



5期 山田 允（北区）

ご丁寧なお見舞い状をいただきありがとうございます。幸い、居住地の北区は神戸市内では比較的被害が軽く、家屋および家族も無事であったことを喜んでおります。災害後の大阪までの通勤には苦労しましたが、4月1日付けで転勤し、現在は名古屋市内で单身生活を送っています。遅れましたが、勤務先等を連絡させていただきます。

14期 楠屋 外茂子（西宮市）

1月17日未明、何か何だか分からない状態で飛び起きる。まず目に入ったのは、明かりが天井に向かってはねたかと思うと、パッと消えた事です。その間も突き上げが強く、まるでエグソシスト（？）状態。あとは真っ暗な中で、まるで家中が平行四辺形になってしまうかのような強烈な横揺れ。布団をかぶる余裕もなく、振り落とされないように只々ベッドにへばりつくだけ。それでも家の被害状況を推察しようと、耳をダンボにするが、何も聞こえない。（食器棚、テレビ、箆笥、本棚が倒れ、シャンデリアが天井に当たって割れていたり…という事から考えて、何故だか分からない。）夫が雨戸を開けた音で、家が歪んでないと思像する。

身内の無事を確かめた頃、夜が明け始める。

（北口町の義母の家は全壊。）ラジオをつけるが、要領をえない。その時はまだ、このような事になっているとは思ってはず、家の前の国道171号線の陸橋部分が線路上に落ちているのを信じられない事のように見ていた（走っていた車も一緒に落ちていた）。

実家に電話をかけなければ、と思いつつ、家の片づけや、雑用に追われる。その日一日中、大・中・小、いろいろとりまぜて、のべつまもなく地震が来る。兄や姉達は、私達が死んだと思っているかもしれない…と思うが、しばらく死んだ事にしておこうかと、冗談を言っているうちに日が暮れる。（後日、電話で叱られた）

阪神大震災とわが家について

6期 小川 修司（尼崎市）

OBとなって以来、ほとんど名ばかりの状態です。一言お便り致します。

わが家は進度7の東の端より武庫川をはさんでほぼ2kmのところにあります。マスコミで御存知のように、武庫川が防震材のように働いたのか？すぐ近くで犠牲者は出ない状況でした。全壊の家屋も少なく、外観上被害は小さいように見えたが、4ヶ月経過した今、補修をあきらめて取り壊す家屋が目立つようになっています。

地震は、近くの墓地の墓石が相当倒れていましたから、進度5以上は間違いなくあったようです。目が覚めた途端に家具が倒れ、家族の中で不覚にも私のみが十円ハゲを作る次第となりました。

電気は当日中に復旧し、ガス水道も不完全ながら2-3日中に復旧しましたので、大震災の

この4カ月の間に本当にいろいろな事があり、一日一日が、初めての体験の連続でした。自分が激震地真っ只中にいたなんて、いまだに不思議な気がしています。

幸いにも、近くに当日から開いていたスーパーがあり、阪急西宮北口駅にも近かったため、二日目には大阪まで買物にも行け、物資には不自由しませんでした。給水車や救援物資の世話になる事もなく、自力でやってこれました。

沢山の方が亡くなられたり、財産を無くされたりしている現状で、不謹慎かもしれませんが私にとって震災は、悪い事ばかりではありませんでした。

20数年ぶりに電話をくれた、大学・中学時代の友達。小さい身体で、水や弁当を持って見舞ってくれた大学時代の友。安否を確かめ合い、支え合った近くの友人達…すべて忘れる事のできない出来事でした。

あらためて自分の生き方を考えてみる、本当にいい機会でした。

15期 金井 澄 (明石市)

(2月6日、15期全員に届いたもの。「あれで代用しておいて」とのこと)

謹啓

このたびの兵庫県南部地震に際しましては、いろいろとご心配をいただきありがとうございます。ありがとうございました。

職場や家庭に迷惑をかけないように、昨年秋の3か月にわたる東京ボケを癒すべく静かにリハビリ中?であった私にとってまさに寝耳に地震で、衝撃の出来事でした。幸いにも家族をはじめ職場の人達もけがもなく元気です。

発生時には、私自身もタンスの下敷きになり、何が起こったのかわかりませんでした。家屋や家財には多少なりとも被害がありましたが、5千人を超える死者をはじめ、災害の規模が時間の経過とともに判明するにつけ、生きていることの幸せをあらためて噛みしめている次第です。

明石市でも東部地域にかなりの被害がありま

した。死者5名、全半壊535戸があり、10か所の避難所に役4千名の市民が一時避難しました。また、学校、道路、橋梁などの公共施設の大半が損壊し、災害救助法の適用となりました。そのため、通常の業務のほか、交代制で食事の配送、給水手伝いや倒壊家屋調査などにフル回転の毎日でしたが、ようやく落ち着いてきました。

余震が続く日々ですが、何とかなさ!と開き直りとプラス思考を行動に移す時だと頑張っております。今秋に能登で皆さんと再会し、美味しい酒と肴で乾杯できることを楽しみにしております。(注;15期同期会を11月穴水にて開催予定)

最後になりましたが、くれぐれもご自愛いただき、ますますご活躍されますようお祈り申し上げます、お見舞いのお礼とさせていただきます。

敬具



15期 宇野 潔

17期 宇野 和子 (北区)

「せんせい、あのね」 うの はるな

わたしは、はじめ なんだか、ぐらぐらしてると おもいました。そしたら、セーラーマンのほんが、ぜんぶおちてきたので びっくりしました。

わたしは、「じしんだ。」とおもいました。

そしたら、おかあさんが、「おふとのなかにもぐりなさい。」って、かいちゅうでんとをさがしてもってきていいました。

「あゆみ、ラジオをもってきて。」って、いいました。おとうさんはラジオをきいていました。そのあとだいどころにいきました。そしたら、しょっきだなのなかで、一ばんうえのしょっきがよこになっていました。

つきは、おねえちゃんのところにいきました。ラジオももっていきました。

そしたら、こうべがしんど6って、ラジオで

いていました。しんどさが、かべにひびがはいるって、おねえちゃんのきょうかしよにのってました。えばらのおばあちゃんのうちが、しんどでした。

わたしは、「にっぽんがしずむ。」とおもいました。でもおかあさんは、「にっぽんがちぎれる。」って言って、「ひがしはたいへいようになちかいから、ひがしにひっぱられてしずむ。」って、おかあさんはっていました。

(地震後1週間、学校はお休みになりました。再開されてから、学校で書いた、春菜の作文です。)

原稿遅くなりまして、申し訳ありません。地震の日の事については、末娘の作文を読んでいたければ、雰囲気かわかると思います。

我が家(マンション)のある北区は、幸い、被害は大きくありませんでしたが、それでも道路や建物にヒビが入った所もあり、屋根をおおうブルーシートもまだチラホラみかけます。又、地震後は、被害が少なかった地域ということで、救援の拠点となったり、他地域からの避難や買い出しの人などで随分ザワザワしていました。今までが、山あいの小ぢんまりとした静かな地域だっただけに、余計そう感じられたのかもかもしれません。

我が家も、他の多くの家庭と同様、防災についての準備など何もなくだったので、ワングル仕込みのアウトドア趣味のおかげで、懐中電灯、ローソク、ラジオなど、常に身近にあり、多少のサバイバル生活に必要な道具類も持っていたのは、心強かったです。

ただそれは、建物自体が無事だったからで、早朝のまどろみの中、突然家屋の倒壊に見舞われた方は、本当に余裕などなく、自分や家族の生命のことは頭になかったことと思います。

交通網の寸断、変則的な学校生活の続く中、長女は、不安な思いで高校を受験しましたが、幸い希望通りの学校に進学し、高校生活が始まりました。とは言っても、被災地の真っ只中にある学校は、いまだに多くの方が避難生活を続けておられるため、他校のグラウンドを借りて

の仮設プレハブ校舎で、彼女の高校生活はスタートしました。

震災から5ヶ月近くたった今、日常は戻って来つつあるものの、決して以前と同じ日常ではありません。被害の少なかった私達でさえ、見えない疲れと、どこかバランスを失ったような心をひきずっています。神戸の人達が、健康な日常生活を送れるようになるまでには、まだまだ時間が必要だと思います。



15期 高村 千佳子(北区)

(「1階だったから、湯のみが倒れた程度。大丈夫です。」との電話をもらっています。)

26期 藤田 章三

26期 藤田 靖代(加古川市)

1月17日未明。ゴーンという地鳴りとその後のすさまじい揺れで叩き起こされましたが、そこは地震オンチの関西人のこと、にわかには、これが地震とは理解できず、木造の我が家が「ギンギン」と音たてて揺すられている様をボウ然とながめておりました。

震源地からの距離でいえば、神戸、西宮などと変わらないものの、加古川は、全壊・半壊といった被害を受けず、我が家も壁紙の破損(石膏ボードの継目で裂けた)と、基礎コンクリートの小さなひび程度で済みました。

ライフラインに関しては、水道・電気・ガス(我が家はプロパンガス)ともに無事でしたが、電話は1週間ほど使いものにならず、電車の不通、幹線道路の渋滞とともに、生活基盤の意外なもろさを痛感しました。

ともかく家族4人が全く無事で済んだことには、この震災の規模の大きさを思えば、本当に感謝せずにはいられません。

被災者の方々へ心からお見舞い申し上げるとともに、心配して下さったワングルの仲間達には本当に有り難く、お礼申し上げます。

金沢大学ワンゲルOB会御中

月日の経つのは速いもので、地震のあった日から4カ月以上の日がたちました。その節はたくさんの方から、お見舞いや励ましの手紙、電話を頂戴し、ありがとうございました。

地震直後は誰もが余震に脅え、マスコミも連日被害の状況や避難所の生活を報道するなど、地震とともに暮らしておりましたが、地震直後から急に仕事が忙しくなり、日一日と忙しさの中で生々しい記憶は薄らいできた気がします。マスコミも3月中旬の地下鉄サリン事件以降はオウム真理教一辺倒の報道となってきました。今は震災のことは殆ど報道されません。自分も3月末に転居をし、被災地から離れたこともあり、阪神大震災もだんだんと遠い日の事になりつつあります。

地震のあった日は寒い頃で、水とガスがないため、結構シンドイ生活もしました。会社は地震の翌日には出てこいと、訳のわからない上司が結構薄情であったり、地震のあった日にみんなで消火活動をして、転勤族が急に町内の自治会に溶け込んだり、女房の実家に一時避難して善意に触れたりいろんなものが見えた気がしました。

今は既に初夏、梅雨入りして蒸し暑くなりつつあります。当初は復旧に相当な時間がかかると思われて山陽新幹線も4月には開通し、阪急神戸線もこの6月12日から全線開通となります。神戸三宮も「そごう」「大丸」が営業を再開し、確実に日常生活としての落ち着きをとるもどしつつあるように見えます。生活の復興とともに徐々に「思い出」の範疇になっていく気がしております。（もちろん、肉親を亡くしたり、家を失ったり、今も避難生活をしている人には「思い出」どころではないと思いますが。）

さて、「月見の宴」を予定通りされるとのこと大いに結構かと思います。OB会の運営には舟田さんをはじめ大変、お世話になりありがとうございます。今のところ予定がはっきりしませんが、地震の話で盛り上げることもできようかと思います。

なお、この手紙は6月10日に書いております。5月末締切から2週間が過ぎようかとしており、もう書かないでおこうかと思いましたが、返信用封筒もあり、何も返事を書かないのも大変失礼と思い、夜中にワープロを打っております。本当にすばらで申し訳なく思っております。それでは、いつかまたお会いできますように。

〒560 豊中市東泉丘1-30-3 (205号)

横井 恒雄

↑
住所 かわりました。

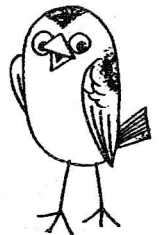
他には、

7期 飯田 利之 (西宮市)
7期 富永 浩之 (中央区)
8期 黒崎 史平 (中央区)
8期 藤井 洋治 (須磨区)
10期 藤井 直樹 (伊丹市)
11期 加藤 忠好 (明石市)
14期 大田 正喜 (福保郡)
17期 藤井 芳治 (宝塚市)
24期 岡原 明彦 (西宮市)

32期 小山 恵介 (多紀郡)
33期 寺島 祥文 (加古川市)
34期 松浦 真也 (明石市)

の方々が兵庫県在住のOBです。8期代表の山村さんから「我期は全員大丈夫」の連絡があり、34期松浦さんは、94夏号の返信中に消息があります。

上記の方々には、今回の返信葉書にて、連絡がいただけますようお願いいたします。



毛勝山遭難

事務局での経緯



5月28日(日)

今年はシャクナゲの当たり年らしい。これまでも砂御前、鳴谷の尾根をシャクナゲの木の多い所だと通ってきたが、それが一面に咲き、シャクナゲロードになっていた。一方湿地帯の方はミズバショウが、これも斜面のはるか上部まで、目覚めたばかりの白い帽子の小人達といった風情で広がっている。むろん、頂上ではダイナミックな白山のパノラマが迎えてくれた。本当は荒島岳へくろゆりクラブのサポートに出ていかなければならないのに、あえて分県ガイドの写真がすんでいないと、鳴谷山へ向かった舟田家には、幸せ過ぎる満点山行だった。

そんな興奮のさめやらぬ夜9時半、電話がなる。3期OBの高島さんだった。彼には35周年記念誌の時、大量の資料を送っていただいております。

「ああ、あの時はどうもお世話になりました…」

「実は、昨日毛勝へ登山した知人が戻らず、今日捜索隊が出ましたが、見つかっておりません。現役の方に頼んでもらえませんか。相応のお礼は出したいと言っております。」

とりあえず、連絡先である遭難者宅寺崎さんの電話番号をメモする。どう判断してよいのかわからない。もちろん、さっきまでの興奮はふっとんでしまい、ただ心臓が高鳴る。

ともあれ、突然の電話ばかりで申し訳ないが、大島会長に電話する。びっくりされた後、「現役に連絡してみて。お世話をかけますけど」との指示。

でも…。現役主将の佐川さんなら、1週間前、新トレの倉谷で会い、少しOB風を吹かせてきたので、面識はある。でも…「OBの知人と我々と、どんな関係があるんですか？」とか「それに従わなければならないんですか？」なんて、反問されたら、どうしよう。実際、何の権限だってない。でも時間がない。ままよ！と電話をとる。



毛勝山で男性不明

高岡の
会社役員

単独登山したまま戻らず

二十八日午前一時ごろ、寺崎健治さん(50)の家族が、高岡市中川上町、会社役員(一)ら、寺崎さんが魚津市と富山県宇奈月町にまたがる毛勝山(標高二四一四)に、時間になっても戻らない。

と魚津署に届け出があった。同署と奥能登山岳警備隊の隊員ら十二人が入山して捜索にあたるとともに、午前六時から奥能登ヘリコプター「つるぎ」も出勤、空からの捜索を続けたが、毛勝山一帯はガスが濃く、寺崎さんは見つかっていない。大学時代、山岳クラブに

所属していた寺崎さんは山の経験が豊富で、奥内の山のほとんどを走破しているが、毛勝山登山は初めてだった。

しどろもどろに、3期のOBから現役に頼んでくれるよう連絡が入っていること、そして、現役とはあまり関係がないけれど、遭難対策を現場で見てくるのもいい体験になるのではないかと付け加える。

「ハイ、あたってみます。」で電話が切れる。第1難関突破。だけど、今度は、本当にでかけるとなったらどうしよう。また違う不安が募る。〈責任〉におしつぶされそうになる。

頃合をみて、佐川さんにかける。ずっと話し中だ。かわいそうに、あちこち当たってくれているのだろう…連絡費を前もって渡しておくべきだった。剣岳の事故の翌年に入部している彼らの方が、〈遭難〉にはびっくりしてしまうかもしれないのに。

ようやくつながる。時、10時半過ぎ。

「明日動こうか迷っているのが二人。その次の日からなら、何人かは動けます。」

寺崎さん方へ連絡をいれる。高島さんは帰宅された後で、遭難者の甥という方が電話に出られる。

「今の所、県警の方と捜索隊が10人程。明日が正念場と思われるので人手が欲しい。明日は5時半に魚津署へ集合して欲しい。それに間に合わないようであれば、以後は携帯電話か、この自宅へ連絡をとって問い合わせさせて欲しい」あちらのせっぱつまった気持ちが伝わる一方で、これだけの情報で、どうして現役を走らせられるものか?!

困惑しながら、高島さん宅へかける。まだ帰宅しておられず、奥さんの返事。

「ご迷惑をおかけしております。先程現役の友野さんからもお電話をいただきました。まだ戻っておりませんが、明日早朝こちらからかけると申しておりました。連絡先は佐川さんと聞いております。」

では、明日になってからということか…。

以上を、大島さん、佐川さんに知らせる。



5月29日 (月)

午前6時半、高島さんより電話。

「今日の捜索により、捜索会議が3時から5時の間に行われ、以後の体制が決まります。

その結果を5時までには入れるようにします。

そちらでは何人動けそうですか。」

昨日の佐川主将の数字を伝える。

「OBの方ではどうですか?」

「あたっていませんが、23期の小久保さんなら高岡だし、チロル山の会に入っているので、動ける方をあたってもらえるかもしれません」

この情報も、30周年山行で個人的に彼と話をしたから知っていること。OBの誰がどれだけ山と関わっているものか…。何ら情報の整っているOB会ではない。電話をいれても、狼狽と困惑に染まるだけであろう…。

ともあれ、何人か動くとなれば、動く人達の立場はどうなるのか? 気楽な学生とはいえ、後ろには親がいる。トラブルに巻き込まれることを喜ぶはずがない。やはりここは前田顧問に連絡と指示を仰がねば…。

午前9時半、前田顧問の研究室へ電話。昨日からの経緯、学生が動くにあたり、どうフォローしたらよいのか? 大学へはどう対応すればよいのかをお尋ねする。

「それは連絡をいれておいた方がいいでしょう。遭難者の家族から、OBを通して出勤を頼んだのでよろしくとでも、学生部学生課課長補佐の寺田さんに、前田から聞いたと連絡を入れておいてもらうといいですよ。」

他に動けるとしたら、石川君らの代が一番動きやすいんだが…。丁度日曜日まで現役達は斥候で、雷沢に入っていたんで、もっと早く分かっていたら、そこからすぐ捜索隊に加わったんですけどねえ。」

メガトン級の責任に押しつぶされそうな私にはうれしくなるようなアドバイスであった。

続いて、院生OBの石川さんに、物理学科の物性物理研究室の電話で連絡。そこで、明日から動くといっていたのは彼らであったことが判明。

「昨日の佐川からの電話を、僕らの期にはみんな回して、動く用意をしています。お茶くみでも何でも、現場へ行って、できる範囲のことは動きます。」

さすが遭難を体験した期は対応が違うなと感心。連絡が入り次第、石川さんに直接連絡を入れることにするから、と切る。

以上をまた、前田顧問に連絡。

「やっぱりあの代はしっかりしてますよ。あと思い出したんだが、早川なら毛勝は行きますよ。去年、追悼山行の時、雷鳥沢でたまたま会って、彼も追悼に加わってくれたんだが、毛勝へ行くと言うてました。富山化学の山岳部に入ってるいうてたし。彼なら動けるんでないですか。」

そうか！OB会に連絡が来ん来んというより、顧問の方がよくご存じなのだ。頼まれ顧問ではなく、山現役の顧問であることに感謝。

10時半、高島さんは留守だった。寺崎さんに直接かける。対策会議の結果を待って待機していること。ワンゲルの顧問にも連絡をいれてあること。もし出勤が必要であれば、学生課へその旨の連絡を入れて欲しいこと。

寺崎さん方では年配の方が電話番号を引き受けておいでた。

「実は、捜索隊の隊長に、金大の山岳部（！）にも応援を頼んでいると申し上げたところ、毛勝は雪山の経験があるだけでは間に合わない。毛勝へ入ったことのある者でないと動いてもらう訳にはいかないとおっしゃってありました。私共も、もうあきらめてはおりますが、会議の結果を聞いて改めてご連絡をいれさせていただきますので」

ここで、高島さんからの電話がはいる。顧問に連絡をとったこと。学生が動くにあたっては、寺崎さんから学生課へ要請を入れてもらうよう

頼んだこと。待機しているのは院生OB達であること。

「さっきの電話では、毛勝の経験者でないと…ということでしたが…」

「雪山の経験は有るんでしょう？」

「ええ、ありますが…。ああ、あと19期の早川大善さんが富山化学の山岳部にいて、毛勝の経験もあるそうです。」

「富山化学ならわかるから、連絡してみます」
…皆がパニックなんだから、話が食い違ってくるのも仕方ないか…。さて、3時まで、何か抜けていることはないだろうか？



午後1時。こういうことでは、役員中誰よりベテランであろうと、楯さんにかける。昨日からの経緯と、

「今のところ連絡の便をとるという立場で動いてはいるけれど、他に何か思いつくことはありますか？」

「早川のことくらいで、ちょっと思いつかないんですが。捜索が長引くようであれば、自分も都合をつけて加わるようにしてみます。」

今日、明日というわけには…。それに、今の時期の毛勝となると、正直いって怖いですね」
対策会議の結果を聞いてまた相談することにして切る。

午後2時。高島さんから電話。

「対策会議はまだだが、今のところ、地元山岳会が15名ほど。他にベテラン勢が30人は集まっているそうです。どうやら動いていたがわずにすみそうですが、会議の結果が出てから改めて…」

とのこと。

午後3時半、寺崎さんから電話。

「只今魚津署におりますが、隊長のおっしゃるには、今一番危険な箇所の搜索にあたっている。二重遭難の恐れがあるので、入らないでほしい。2-3日して、それ以外の広範囲に搜索を広げる時にはお願いするようにとのことでした。私共、隊長のおっしゃるとおりで動いておりますので、そうになりました時には、改めてよろしくということをお願い致します。」

—それは、もう<遺体>の搜索を意味することでもあり、淡々とした口調の中に、無念さがにじみ出ていた。

以上を、石川さん、前田顧問、大島会長、榎さんに連絡。

午後5時近く、高島さんから

「もう、待機は解いたんですね？お世話になりました。改めて、皆さんにお礼に行きます」
とのこと。

長い、重苦しい一日だった。

5月30日（火）

こちらの新聞には何も載っていない。高島さんの所へかけるのも、まして、寺崎さんにかけるのもお気の毒で、魚津署へ

「待機中の者だが」

とかけてみる。今日も見つからず、明日も搜索隊が出るとのこと。

5月31日（水）

午後5時、高島さんが寄っていかれた。悪い結果になりそうな経緯と、溜まった仕事にご憔悴の様子ながら、

「待機していただいた方々によろしく。」
と金封をこつづけていかれる。

快い返事で応えてくれた彼らへの、せめてもの気持ちとばかり、すぐ届けに行く。

「動いていないのに」と彼等は躊躇していたが、現役主将の佐川さんには部への寄付として、

院生OBの石川さんには、剣岳追悼への寄付として、受け取ってもらった。

この日の昼、役員でグループ叢のメンバーでもある久富さんは、榎さんから

「今度の週末は、毛勝へ行くことになるかもしれない」

と聞いていたそう。

また、前日出したOB会役員通信により、今日は、OB会役員全員にこの遭難は伝わっている。

6月2日（金）

天候と新聞を気にしつつ日が過ぎる。

午後4時半。高島夫人から電話。

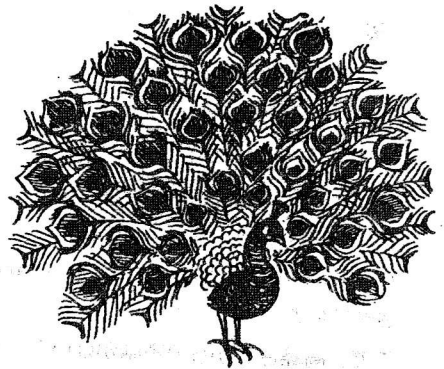
「寺崎さんが見つかりました！生きておいでました！」

午前中に見つかったのだそう。でも高島さんが東京出張中で、こちらの連絡先がわからず、さっきやっと連絡がとれて、お知らせできることになったとのこと。

こんな連絡はうれしい。電話をとった誰もが驚き、喜んでくれた。

それから夕刊を広げ（北国新聞にはわずかの記事であったが）そして考えてみれば、ひたすら電話が行き交っただけのことでもあったが、思わぬつながりのあった遭難者無事救出の記事を、何度も読み返してみたのだった。

（富山新聞は、15期松林 知一さんに入手していただきました。）



毛勝山遭難者の記録

高岡市 寺崎 健治

*はじめに

私は平成7年5月27日(土)に日帰りの予定で毛勝山(2,414m)に登るつもりで登路を勘違いし、間違えて大明神山に登ってしまったため帰路を滝に阻まれ、止むなくヒバークを強いられ、入山7日目に県警山岳警備隊により救助されました。

救助される際、隊員より説明を受けるまで、私の登ったのは毛勝で、今いる場所は毛勝谷の支流の一つだと思っていたお粗末さで、いささか恥ずかしく思っております。

この度、富山県人社の高島社長より、遭難救助出動のためにスタンバイしてくれていた金沢大ワンダーフォーゲル部の会報にこの遭難の経緯を掲載したいので、是非記録を書いてくれと依頼され、今回の遭難には内心忸怩たる思いの私としてはお断りしたかったのだが、遭難当事者として反面教師になれば、今後の遭難防止の一助になるのではないかと、恥をしのんで執筆をお引き受けした次第である。

山が好きな若い人達が、この記録により、少しでも安全登山を心掛けていただければ、私も嬉しく思います。

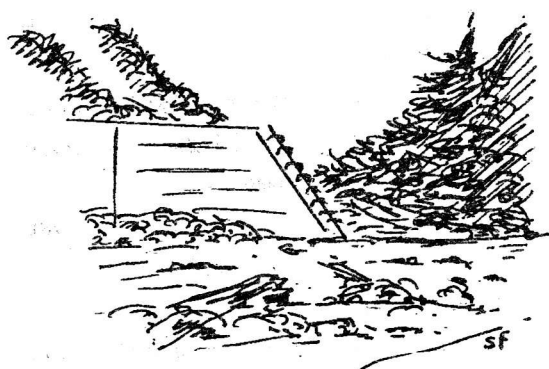
*毛勝山概要

毛勝山(2,414m)は北ア剣岳の北に位置し、北より南に、毛勝山、釜谷山(2,415m)、猫又山(2,378m)と並び、この三山を総称して毛勝三山と呼んでいる。

この山には一般的登山路は無く、雪渓を利用して登頂になる。毛勝の雪渓は標高差1,200mで、日本三大雪渓の一つとして有名な白馬大雪渓でも600mだから、この長さがわかる。

この山は日帰りで高山気分が堪能できるので、県内外の登山者に人気が高い。

故深田久弥氏も、この山を日本百名山の中に入れたかったらしい。



一般登山路である阿部木谷-ボーサマ谷往復の場合、登り4時間半、下り3時間である。雪が落ち着き、アブローチの林道に車の乗り入れが出来る5月中旬より、雪渓上にクレバスが発生する前の6月中旬までが登山最適期である。

戦後の遭難事故は20件で、9人の死亡者を出しているという。

*5月27日(土) 晴れ 第1日目

3:20起床、3:50自宅(高岡市)発。途中のコンビニにて、オニギリ、クリームパンを買う。小杉ICより魚津IC(4:35)、途中道を尋ねながら走るの時間がかかり、片貝山荘上部の、雪で塞がれた林道地点着5:35。そこには多摩ナンバーのワゴン車に、5-6人の人達が出発の準備をしており、お先に出発する。

(5:50発)

体調、天気共に良好で、ボカスカ歩く。最後の砂防堰堤に取り付けられたクラップを降りる。途中アイゼン着用、休憩無しでドンドン登る。きつい登りだ。シュカプラの窪みを利用して登る。ガイドブックの説明にしては急な斜面だと思いつながる。

稜線着10:40。頂上11:20着。稜線のツメが急であったことと、ピークが右側に見えたことから、登ったのはボーサマ谷ではなかったようだ。頂上はだだっ広い雪原で、15cm角の三角点があった。あとから来る登山者を待ちながらスケッチでもしようと思ったが、風が強く、寒い

ので、早々に下山することにする。

地面が頓を出した三角点より雪面まで1.5m程の高さがあったので、ピッケルで30cm角の階段をつけて登る。

案内書によれば、ポーサマ谷鞍部より頂上まで約15分とあったので、下り始めて約5分程の所にあった右側の大斜面を下る。

踏み跡や、グリセードの跡のようなものが見える。グリるにはいささか急すぎるので、アイゼンを外さずに快適にドンドン下る。

途中雪渓の崩壊箇所があり、右岸の山菜の多い灌木の中を歩く。しばらくして、やはり雪渓が崩れており、右岸の滑りやすい草付きの急斜面をへつる。下は滝で怖い。滝を巻いた所で雪渓に下るのだが、そこに巾1間程のシュルンドがあり、思い切って跳び降りる。

雪渓上で小林止して考えた。ここまでのコースがこんなに悪いのだから、この下はどんな悪場があるかも知れない。未知の谷は下るなどというのが山の鉄則だから、これ以上この谷を下るのは危ない……と、登り返すことにする。



2時より戻り始め、途中雪渓を2本間違え、また戻ったりしながら登り続けた。

やっとの思いで稜線上にたどり着いたが、ガスってきたため、場所不明。6時半であったし、天気もあやしげで、なにしろ13時間近くも歩いて憔悴し切っていたので、稜線上の笹ヤブの中でビバークすることにする。比較的平らで凹凸のない所にツェルトを張り、2m角のビニールシートをフライとして張る。ツェルトの近くの雪面に生えていた立木に、赤いバンダナを結び、レスキューのための目印にする。

空腹だったので食事を摂ることにする。入山時に持参した食糧は、オニギリ4個、クリームパン1個、カンパン1袋、コンビーフ1缶、チョコレート、バター飴20個、ウイスキー150ccで、既に、オニギリ2個とパンは消化済み。

夕食はオニギリ1個のみ。寒いので、着替えの長袖シャツ、モモヒキ、パンツ、靴下などを総て着用する。セーターやゴアテックスのコートも着込む。高度2,000mとして、温度低下12度、下界の最低気温が15度として、氷点下にはならないだろうと計算する。念のためにゴンスケ（尻皮、尻敷き）を背中に入れ、タオルを首に巻き、毛糸の帽子を被り、軍手とスキー手袋をはめる。ザックの物を総て出し、足を入れる。

9時就寝。明日の中田君と河原君との荒島岳山行が気になる。美恵子、心配かけてゴメン、明日は帰るから。疲れて暫くまどろむが、寒さですぐ起きる。ウイスキーを少し飲んで体を暖めて2時間程眠れた。寒い！まだ1時。朝が特遠しい。寒いのでローソクをつける。ローソクも手をかざすと暖かいが、ツェルト内はほとんど暖かくなれないようだ。下界の暖かい布団が恋しい。丸く縮こまって、朝までガタガタ震えていた。

* 5月28日（日）晴れ 第2日目

5時起床。朝食はオニギリ1個。ツェルト撤収後6時出発。猛烈な藪漕ぎ。7時頃か雪の稜線上で、剣岳方面から頭上にヘリが飛ぶ。赤いバンダナをさかんに振るが、気付いてもらえなかった。

主峰まで行かないうちに、左側に踏跡とグリセードの跡らしきものがあり、ルートと判断して下り始める。

ところがこのルートが曲者で、途中逆層の岩場などがあり、そこをビクビクもので通過したが、その先にも悪場が数箇所あり、最後の本雪渓に下る所はおおよそ50-60mの断崖で切れ落ちている。とても下れそうもないので、引き返すことにする。雪が緩んできたのか大がかりな落

石に会い、肝を冷やす。先程の逆層の岩場では足をこらし、5-6m滑落した。滑落の瞬間に体を反転させたので、下の半畳程の岩棚に尻と尾てい骨をしたたかぶつけてしまった。

岩棚の下は急な切れ込みであり、ホッとすると痛さをこらえながら、又、この沢を登りつめ、振り出しから基本的に考え直す必要がある…と、頂上までガンバル。

頂上着2時。今日は日曜日で、他の登山者が



いるかと期待したが、誰もいないのでガッカリする。

暫く待ってみたが、誰も来ないので、仕方なく一人で下ることにする。昨日下った大斜面を避けて二つ目の大斜面（多分、ボーサマ谷…と思ひ込んで）を下ることにする。踏跡らしきものもあり、間違いないだろうとドンドン下る。

すると、昨日の雪溪の崩壊場所に出て、右岸の山菜の多い道や、その下の高巻きの道もそっくりあった。昨日のルートは間違っていなかったのだ！途中、沢を渡渉したり、両岸が急でへつりが出来ない薄くなったスノーブリッジ上をコウゴワ通過したりしながら、今日は家に帰れると期待しながら歩いていると、狭いV字谷に出て、雪が全然ない。その先に滝があって、滝の手前には水が清々とたたえられている。

兩岸を見ると、草付きのガレ場である。私の技量では通過する自信が全然なし。又、仮に岩場をへつって滝の向こう側に行くにしても、滝の落差や岩場の状況もわからない状態では挑戦できない。もう本当にガッカリして、途方にくれる。

仕方がないので戻ることにする。しかしこの辺は谷も狭く、傾斜もきついので落石の危険が多く、テン張ることは危ない。500m程登り、30m程の巾の雪溪の左岸にツェルトを設営することにする。ツェルトを張った所は雪面上に落石もなく、上の斜面は草と灌木が生えていて岩石もほとんど見えないので、落石の心配はないだろう。ただ、豪雨が降った時は土砂崩れの心配があるが…。

雪溪の勾配は結構あり、ピッケルのブレードでならすのに苦労する。整地したところで、付近の雪溪上の流木や倒木、樅の葉をツェルトの下に敷きつめ、ビニールシートをフライにする。

夕食はウイスキー少々（これで終わり）と、コンビーフの缶詰のみ。今日3時頃、ルート途中の雪溪の崩壊箇所であらゆる生えた灌木帯を歩いている時、ヘリが下流の方向へ飛んで行き、赤いバンダナを振ったが気付いてもらえなかった。今日中に帰れると思っていたのにガッカリだ。就寝7時半。お尻が痛むのと、寒さで、やはり眠れない。

*5月29日（月）晴れ 第3日目

起床4時。今日も快晴。日帰り山行となれば今日は遭難2日目。昨日のヘリは何のために飛行していたのだろうか？私のためか？又は他に遭難者があったのか？もし私の為とすれば、遭難2日目で打ち切るわけがない。

よし！今日はヘリに発見してもらおうぞとハルキル。高い枯木を見つけてきて、それに赤いバンダナを結び付け、救難旗にする。2m四方のビニールシートを雪溪の上に広げ、上空からでも目立つようにし、紫色の目立つザックも外へ出した。

午前中に下に水が流れている雪溪上のテント場では危険だと思い、左岸の草の斜面のテント適地を探していたところ、ウドを見つけた。

シメタと、4-5本ピッケルのブレードで切って帰った。生でかじったが旨いものではない。

しかし、空腹は満たせた。残りの食糧—カンパン15個、鮎16個。

今日、夕方まで1度もヘリを見かけず。やはり昨日のヘリは私の搜索のためではなかったのか？それとも未だ遭難届を出していないのか？又は搜索、救助の費用が高くつくので断ったか？まさか…。様々な疑問が頭をよぎる。美恵子に何かあったのか？家族に何かあったのか？それで届が遅れているのか？下界で、すぐに帰って来るだろうと楽観視して届が未だだとすれば、いささか心配なことになる。食糧も乏しくなってきたし、このテントサイトも決して最良とはいえない。

風が強いし、雪の溶け方が早いので、毎日のように下地をならし、ポールやペグの打ち直しをしないとイケない。右岸の水場の下は雪渓が大きな穴を開けており、草付の急なガレ場は水汲みに危険このうえもない。又、大雨の時のツェルト上部の崖崩れも心配だ。

家ではあまり心配していないのかな？美恵子はどうしているだろう。子供達は？中田君、河原君は？兄貴は？

救助隊が来ないとなると困った。あの滝を通過する自信はないし。一般登山者が入山するのは土曜、日曜で、しかもこれだけ雪渓の崩壊が進めば、入山者は皆無かもしれない。

こうなれば自力脱出、強行突破しかないか。しかし危険が多過ぎる。滝を下らないで、尾根を下るか…この尾根の下部は岩か、不安定な草付の危斜面で、登るのは容易ではない。では、もう一度ピークまで登り直すか？しかし、ここまで来る間にも沢山の悪場があった所を、体



力、気力、食糧のない今、無事通過する自信がない。途中バテて身動きが取れなくなった時、安全なビバーク地が見つかるか？

総て悪く考え、前へ進まない。ウツウツと一日を過ごす。夕方、腹の具合が悪い。下痢がひどい。生のウドのせいかな？夕食は抜き。未だ暖かい時に寝ておこう。就寝6時半。

* 5月30日(火) 晴れ 第4日目

テント場も設営後2日たち床が痛んできたので、少し下の箇所に移すことにする。ピッケルで斜面を整地するのだが、空腹で腕に力が入らず、少し動いては2-3分休み、ユルユルと仕事をし、2時間近くかかって完成する。

今度は床に倒木を敷きつめ、その上に縦の葉を並べるように敷いたので、良い床が出来た。

生のウドで懲りたので、今度は煮て食べることにする。ウドを斜めに薄くスライスし、アルミカップに入れ、水を最小限入れ、カップの底についた水気を拭き取り、ガスコンロをアルミホイルで被い、炎を最小限に調節して沸騰後はすぐ火を消して余熱だけで煮た。

ガスボンベは1本しか持っていなかったのが極力節約を図ることにし、暖房には一切使わないことにした。

一切の調味料の入っていないウドは不味く、もどしそうになるのを無理矢理食べた。私はこれを「ウドの真水炊き」と名付けた。これを食べると、下界でどんな不味いものでも喰えるのではないだろうか。

今日も終日、昨日と同じパターンで過ごす。ヘリの機影も全然見えず。おかしい。搜索願いを出していないのだろうか？美恵子は、子供達は、中田君、河原君は、兄貴は、会社の人、誰も疑問に思わないのだろうか？下界の状況が全然わからない。携帯ラジオを持ってこなかったのか悔やまれる。ただ、ここは定期航路とみえて、ジェット機がよく飛ぶ。その度に空を見上げて手を振る。視力2.5の乗客がいらないだろうか？

こうなったら俺の強行突破を図ろうかとも思ってみる。でも未だ死にたくない。死体で早く帰るよりも(死体も発見されないかもしれない)、遅くとも生きて帰る方が良いだろう。いずれにしても皆様に迷惑のかかる話…なのだから…と居直る。

神大山岳部の西田先輩や、五味、金子、前田、中野達や現役の誰かに連絡すれば、すぐ遭難対策本部を設置して行動に移してくれると思うが、美恵子も気が動転しているとすれば、そこまで気がつかないだろう。

いつも出発前に家に置いてくる山行計画書を、数日前からの忙しさに紛れて書かなかったのが悔やまれる。どうしてよいのかわからない気持ちで就寝。

夜中にドシャブリの雨。そのうちに雷が鳴る。稲光より雷鳴まで1秒から2秒。350mから700mか。近い!怖い!ツェルトの外にビッケルやアイゼンがあるので心配だ。かといって、それを遠くに置きに行く勇氣もない。ただただ小さくなって神に祈るのみ。雷は2時間近く続いただろうか。その間、生きた心地がしない。もしここで死んだら、美恵子ゴメンと言うのみ。最後は覚悟を決めて、町人が武士に向かって、「エエ斬れるものなら斬ってみな!」という心境になっていた。そのうち、雷雨も止み、朝。生きていた!神に感謝する。

* 5月31日 (水) 晴れ 第5日目

4時起床。いつもながらにツェルトの内面が結露して、その水滴が落ちて衣類が濡れている。これは何か対策を練る必要がありそうだ。

今日も晴天。今日は良い事があった。まず、右岸の水場近くでフキを見つけたこと。今まで危険な水場で、夢中で水を汲んでいたのが気付かなかった。フキはウドと同じ要領で煮て食べたが、ウドより美味?であった。それ以後ウドは止めた。

今日も午前中は全然機影見えず。神に祈りたい気持ちだ。どうしよう。

午後になってヘリの飛んでいるのが見えた。夢中で手を振る。気がつかなかったようだ。しかしそのうちに、だんだん近くを飛ぶようになった。いつも、いつも、もう大きく手を振って大声を上げて呼ぶ。近くを飛んでも生憎ガスがかかっていて、こちらから機影がかすかに見える程度だったりして、気がついていない風だ。



そのうちにヘリや飛行機がよく飛来するようになった。もう夢中で手を振る。最後はやはり気がついたようだ。よかった。助かった。これで帰れる。夕方なのに救助できるのだろうか。心配だ。

4時頃になると総ての機影が消えた。外で7時頃まで待ってみるが、何も来ないのでツェルトに入る。空腹を覚えたのでフキを食べる。フキはウドよりもまあまあ喰える。しかし不味い。せめて塩でもあれば…。牛や馬はこれに似た不味いものを、よく喰っているなァと、妙に感心する。モタモタしていたので消燈は9時。やはり寒くて眠れない。明日は下界か。嬉しい。

夜中に幻聴を聞く。女の人達が何か子守唄か数え唄のようなものを、短いフレーズで繰り返して歌っている声が聞こえる。多分、いつも一定でない強弱のある沢の流れがそういう風に聞こえるのだらうと、頭の中で理解していても、やはり怖い。それを打ち消そうと、大声で自分の知っている歌を歌い続けた。

やはり精神的に少しまいっているのだろうか。ガンバレ!助けは来る。

* 6月1日 (木) 晴れ 第6日目

起床5時。朝食はフキの真水炊き。今日も晴れ。幸運なのは、夜に降っても日中晴れることだ。ツェルトの内側は外気温との差でベっとり結露し、それが寝ている衣類の上に落ち、朝は

水浸しになってしまうが、日中お天気だと、それを乾かすのに好都合だ。

サァ！今日はヘリが来るぞ。期待に胸を膨らませて外で待っていると、8時30分、ヘリの音がした。来た！いいよ。ヘリは近くの稜線の上空を飛んでいる。私はあわててツェルトを畳み、ザックの中に押し込み、他の装備も入れ、ザックを作った。

先程のヘリはやがて姿を消し、その後違うヘリが来たが、それも去って行った。私はどういう心境か、ヘリを見ながら残り15個のカンパンを全部喰っていた。山の上空、殊に谷筋は風が強く、乱気流があって、ここに入って来られないのだろうか？特に遭難者を救助するとなると、15-20秒の空中でのホバリングが必要だろうから、なかなか難しいのかもしれない。

あァ、ガッカリだ。こうなれば地上からの救助しかないのだろうか。救助隊を編成して出発となると、ここへの到着は早くて昼過ぎか、遅ければ今夕か。何かウッチャリをくらったようで、沈みこんでしまう。昼過ぎ、ツェルトを張る。

山の良さは、自分の意志で入山し、自分の意志で好きな時好きな場所へ下山できること一だと思いが、下山が叶わない山というのはむしろ憎たらしいくらいなのだ。今回この山に入った事を後悔し始める。

4時頃よりフテ寝の屋敷。暖かいので割合よく眠れる。夕食はフキの真水炊き。

7時就寝。やはり夜中に幻聴を聞く。

* 6月2日(金) 晴れ 第7日目

4時起床。朝食はフキ。昨日カンパンを全部食べてしまったことを後悔する。何か打開の道はないだろうか。少し時期を失した気もする。体力が急速に衰えたのが分かる。

ツェルトの側にボンヤリ座っていると、下の方から、

「オーイ！オーイ！テラサキサーン」

と呼ぶ声。私との間にあるクレバスの向こうに、

6-7名のパーティーが見えた。私は立ち上がり、夢中で手を振った。私は目が悪いので、目を凝らして良く見ると、3人のパーティーだった。

一人の人がクレバスを避け、左岸の崖を高巻きして小走りに登ってきた。

「寺崎さん？」

「ハイ」

「大丈夫？」

「ハイ、大丈夫です」

の会話の後、トランシーバーで連絡をとり始めた。

「こちら県警山岳救助隊。遭難者発見、遭難者発見」

「遭難者は生存しております。生存です」

「比較的元気です」

の連絡に、嬉しさがこみ上げて来た。隊員の日焼けした精悍な顔つきと、ガッチリした体つき、敏捷な動作はたのもしく、正に神々しくもあった。

「腹がへっていないか」

と聞かれ

「へっている」

と答えると、弁当を出してくれ

「沢山食べるともどすから、少しにしておきなさい。柔らかいものを食べなさい」

と言われ、里芋3つとオニギリ半個を食べた。あの味は一生忘れられない。

その後、高額品以外の装備はテント場に残し、アイゼンを着用後、隊員にザイルで確保してもらいながら雪渓を降り、クレバスの高巻きをす。滝の手前の狭いが、比較的平坦な雪渓上にヘリが着地し、私一人が乗り込む。

ヘリに乗り下を見ると、沢山の人々が林道に居り、ヘリを見上げていた。その時はじめて、皆さんの愛情と献身的努力を強く感じた。

ヘリから眺める初夏の陽に輝くたんばや家々を見た時、嬉しいような、切ないような気持ちで、目頭が熱くなるのであった。



*あとがき

1. 捜索活動は、中田・河原両君のおかげで、入山翌日の日曜日早朝より、県警山岳救助隊により始められていた。
2. 私は、阿部木谷より、毛勝谷、ポーサマ谷より毛勝山本峰に登り、往路を帰る予定であった。実際には、出合より本来は東の毛勝谷に入るべきところを、南の大明神谷に入ってしまった。大明神山に登っていた。捜索隊に発見されるまで、毛勝山に登ったと思いこんでいたのであった。1泊目のビバーク地点は、大明神山西南面、標高2,000m地点。2-6日目のビバーク地点は小沢谷の標高880m地点。
3. 今回捜索活動に御協力いただいた方々は県警山岳救助隊、魚津、上市、大沢野、黒部、入善の各警察署、自衛隊、魚津岳友会、高岡カラコルムクラブ、高岡市役所山岳会、高岡ハイキングクラブ、高岡市ヨット協会、並びに各個人的有志の方々です。
4. 捜索活動の初期は、主に、毛勝山-猫又山、阿部木谷、毛勝谷、小黒部などを集中的に捜索したため、小沢谷は最後になった。
5. 私が山行計画書を書いていなかった事、出発時間が早過ぎた事、女房に云ってあった帰着時間の19時迄が長すぎた事から、快晴でもあって、猫又山まで往復をしたとの推定がなされ、捜索範囲が広がってしまった。
6. コースを間違えた原因と、対策
 - a 単独行であった事。
 - b 事前のルート調査、研究が不十分であった。
 - c 初めての山であるにもかかわらず、先頭で歩いてしまった。経験のある他のパーティーに追従していくべきであった。
 - d 休憩もせず、脇目もふらずボカスカ歩いてしまった事。
 - e 時々立ち止まり、周囲を観察するなり、2

万5千の地図とコンパスを読むことを怠った。

- f 各雪渓の分岐では、時間をかけて、正しいコースをじっくり考えるべきだった。
- g 早朝の堅雪の踏跡は残りにくいし、日中の太陽で溶けて消されてしまうので、自分の歩いた道に戻る可能性のある時は、要所要所に目印をつけておくこと。
- h 5-6月の雪面は、雪玉や岩のころがった跡がグリセードの跡に見えたり、シュカブラや獣の足跡が人の踏跡と錯覚し易いので注意。
- i 自分の現在地の確認は、谷や雪渓では眺望が効かないので難しい。稜線やピークでこそ、この確認が大切。
- j 谷や雪渓では、登りで迷いやすい。逆に稜線や尾根では、下りで迷いやすい。

欲しかった装備

万が一のそれぞれを考えて装備を用意すると荷は嵩張り重いものになるので、自分で担ぐことを考えると、程々ということになる。が、今回の遭難で、あれば良かったなと思うものをあげてみる。

1. トランシーバー又は携帯電話
2. 携帯ラジオ
3. 発煙筒
4. 高度計
5. 塩
6. 山岳遭難保険



そのほかのこと

今回救助されて下界に来た時、2-3人の方から

「何故<のろし>を上げなかったのか？」と聞かれた。雪渓上には倒木がゴマンとあって燃やす物は沢山あった。のろしを上げるということを書いつかなかったのは、私にインディアンの血が流れていなかったせいかなーそれは冗談

余談のうちだが、山中の7日間で5kg減った体重は、20数日ではぼ元に戻った。尾てい骨骨

折も未だ痛むが、日常生活に支障のない程回復した。

終わりにあたり、今回の遭難に際し、皆様方から受けた数々の御厚情に対し、心よりお礼申し上げます。

ありがとうございました。



6日ぶりに奇跡の生還

毛勝山で
道に迷い、
5メートル滑落

寺崎さんが見つかったの
は毛勝山山頂から西五^五の
ており、下山途中に道に迷
い、雪渓が切れて滝の上に
された時、寺崎さんは簡易

A high-contrast, black and white photograph showing a person lying on a stretcher, being attended to by medical personnel. The image is grainy and appears to be a reproduction of a newspaper clipping.

二 富山市の県立中央病院

山菜食べ飢えしのぐ

「助からない」と恐怖心も

フキやワドなどを食べて飢えをしのぎました。皆さんに「迷惑を掛けました。謝罪します」。県立中央病院救急救命救急センターで診察を受けた寺崎さんはベッドに横たわり、日焼けした顔にやつれが見られたものの、元気が回復して生還までの経緯を話した。

あめ五二十個程度を持参していた。コンパスや磁石を使っていたが、道に迷い、二十八日夜、谷を下る途中で約五割滑落してしりを強く打った。はって移動して安全な場所で簡易テントを張りビバークした。

日中の気温が約六度だったものの、防寒用のかっぱを着ており、テントの中で寒さを感じた。持参した食料は三日目で底をつき、フキやウドの山菜を採って食べた。当初は生で食べて下痢をしたが、ガスコンロ

を待っていたため、水炊きして飢えをしのいだ。滑落地点に偶然、小さな川が流れていたことも幸いした。

赤いパンダを束に縛って救助を得たが、「飛行機も通ず、助からないのだから不安になった」と発見されるまでの恐怖感が並大抵でなかった心情も吐露した。

「無事で良かった」
涙ぐむ家族

病院で待たれた妻の美恵子と金おは「夫が見つからない間、いろんなことが頭を占めました。無事で本吉に良かったと涙ぐみ、美恵子さんは寺崎さんに「福りましたね」と声をかけました。

谷に車を置いて毛勝山への上り出した。しかし、捜索隊は

廣 廣堂の
春 春に
毒 毒を
 しゅんじゅ 衰えを
 養え 活
 力

搜索ポイントにしていた
 が、一日から搜索の輪を廻
 の谷筋にも広げた矢先の華
 見となった。



夜になつても停
らず二十八日午
前一時ころ魚津
署に捜索願が出
され、連日約二
十人の同県警出
岳警備隊員や本
岡市の力ヲコル
ムクラブ会員、
魚津岳友会員や
自衛隊ヘリコプ
ターなども出動
して二帯を捜索

写真が語るふる里の自然

昨年、石川県によって選ばれた自然百景が、
1冊の写真集になりました。
1葉の写真が語る自然の美しさ、優しさ、厳しさ
この1冊が、ふる里の自然の素晴らしさを語ります。

●変形版 (ﾀﾞｲ242×ｺﾞｺ260mm)

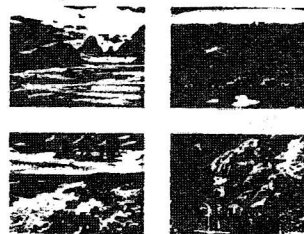
●定価3200円 (税込み)

4月発売

※当社出版物のご予約、お買い求めは最寄りの書店
または、当社までお申しつけください。

いしかわの自然百景

WONDERFUL LANDSCAPES IN ISHIKAWA



昭和文芸堂出版

バックナンバーご希望の方は、はさみ込み
のハガキに号数と冊数を明記してお申込み
ください。

- | | | | |
|------|-----------|------|-----------|
| 第14号 | 特集—街を歩く | 第15号 | 特集—奥山に親しむ |
| 第13号 | 特集—里山を楽しむ | 第16号 | 特集—海に潜る |
| 第12号 | 特集—川と遊ぶ | 第17号 | 特集—田園に学ぶ |
| 第11号 | 特集—島を探索 | 第18号 | 特集—潟湖を巡る |
| 第10号 | 特集—鯨の王国 | 第19号 | 特集—土と生きる |
| 第9号 | 特集—薬草王国 | 第20号 | 特集—水のながれ |
| 第8号 | 特集—白山王国 | 第21号 | 特集—風のように |
| 第7号 | 特集—山菜の王国 | 第22号 | 特集—雪に舞う |
| 第6号 | 特集—けもの王国 | 第23号 | 特集—彩 |
| 第5号 | 特集—温泉王国 | 第24号 | 特集—涼 |
| 第4号 | 特集—渚の王国 | 第25号 | 特集—音 |
| 第3号 | 特集—恐竜の王国 | 第26号 | 特集—光 |
| 第2号 | 特集—野鳥の王国 | 第27号 | 特集—医王山 |
| 創刊号 | 特集—キノコの王国 | 第28号 | 特集—九十九湾 |
| | | 第29号 | 特集—北部白山 |
| | | 第30号 | 特集—犀川 |

石川県のゆたかな自然を収録した写真集ができました。上馬さん、梶さん、舟田 (例の大はしゃぎの入選作) の写真も収められています。今回、著者割引に変わり郵送料無料という形で、金大ワングルOBにご提供できることになりました。

(思ったより売れていないというのが、実情のようでもあります。)

同封のはがき (切手不用) を利用してお申し込み下さい。職業欄に、金大ワングルOBと書いていただくと、本と、上記サービスでの金額の振込用紙が送られてくることになっています。

郵便はがき

料金受取人払

金沢南局
承認
248

差出有効期間
平成8年6月
24日まで

(切手をはらず
このままお出
しください)

<受取人>

金沢市増泉4-10-10

橋本確文堂企画出版室内

「自然人」編集室 行

ご住所

TEL

お名前

年齢

歳

ご職業

お買い上げ書店名

市区
町村

書店

上記のはがきの裏面下部

ご協力ありがとうございました

■バックナンバーご希望の方は、号数と冊数を明記してください。

号	冊	号	冊	号	冊	号	冊
号	冊	号	冊	号	冊	号	冊

■その他の当社出版物のご注文

を 冊申込みます。

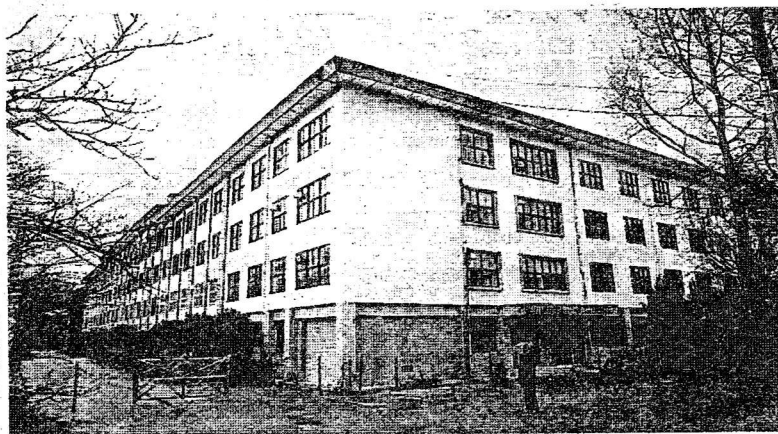
新「城主」に高校生

校舎改築の 二水が間借り

石川県教委は十四日、金沢市の二水高校が八年度から二年計画で取り組む校舎改築工事の期間中、金大城内キャンパス跡地の校舎の一部を仮校舎として使用する考えを明らかにした。通学の便が良い市中心部にありながら静かな学習環境が確保できることから白羽の矢を立て、今春から国と交渉、たつての要請に国側も理解を示した。国立大跡地を

県立高校が「間借り」するケースは全国でも珍しく、金大同窓生らも「城内に再び活気が戻ると、無人化、荒廃防止の面からも期待している」。

県教委庶務課によると、これまでの校舎改築工事



金大城内キャンパス跡地

二水高校が改築工事中の仮校舎として使用する予定の金大教養学部校舎
＝同大城内キャンパス跡地

無人化防止にも一役

金大OB「再び活気」と歓迎

は、校舎を半分ずつ取り壊し、残った方の校舎とグラウンドなどに建てた一部プレハブ校舎で生徒が授業を受けるのが一般的だった。しかし、二水高の場合は敷地が比較的狭いため、校舎を一部残しながらの工事では新設建物の配置に制限が加わり、生徒の安全面や工事の騒音などの問題もあったため、昨年度から仮校舎を別の敷地に設ける計画を立て、七月三月で総合移転が完了する金大城内キャンパス跡地に狙いを絞っていた。

県の金大城址整備計画は用地取得から七年後に整備に着手し、同十年後に市民に開放するとしており、計画自体に支障はないものの、文部省、金大側は当初、「城内の校舎は老朽化しており、生徒の安全が確保できない」「貸し出しの先例をつくるも今後、貸し出し依頼が後を絶たなくなる恐れがある」などとして難色を示していた。

県教委側は「他に方法がなく、緊急避難の場所として提供してほしい。校舎は比較的新しい教養部校舎とし、安全面には十分配慮する」と国側に懇請を続けた。このほど、ようやく基本的な了解を得た。

計画では、教養部校舎二棟とグラウンド、体育館、武道館を改築工事期間の八年九月から十年八月ごろまで借り受ける。この間、借り受けた敷地、建物の管理、整備は県教委が行う予定だ。

県教委庶務課では「交通の便、静寂さ、施設の充実度などから城内キャンパスは最高の学習環境にあり、二水高の仮校舎として何となく確保したかった」と話している。

これに対して金大企画調査課は「国の財産である金大跡地を放置しておくのも忍びない。有効利用につなげてほしい」としている。

8年9月から2年間

小松一岐阜・白川

白山トンネルが計画路線に

地域高規格 道指定へ10年後完成めざす

自民党筋が十五日までに明らかにしたところによると、高速道路と一般国道の中間に位置付ける地域高規格道路の計画路線に白山トンネル整備構想を含む小松・白川連絡道路(総延長約四十五キロ)が指定される見通しとなった。現在、同連絡道路は石川、岐阜県境が白山連峰で遮断されており、

今回の指定で事実上、難工事の白山トンネル着工に向けて動き出す格好だ。来年早々から調査に入る見込みで、白山トンネルがめどとする十年後に完成すれば、北陸と関東、信州地方との人、物の流れが飛躍的に増加するものと期待される。

建設省、来年早々から調査へ

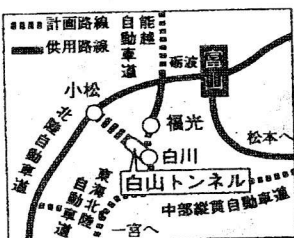
地域高規格道路は、高速・空港、港などへの連絡をス、高速道路など幹線道路の道路を補完するとともに、ムースにする機能を備え、みと交差し、平均速度六

建設省が第一次道路整た。小松・白川連絡道路は現まで難所の白山の山岳地帯に遮られ、実際は不

スの大幅短縮が可能となる。

東京と4時間で直結

小松・白川連絡道路の地域高規格道路指定の見通しとなったこと、事実上の白山トンネル整備事業へのゴ



岐阜県との直結道路が整備されるだけでなく、中部縦貫自動車道、東海北陸自動車道との連結により県内から東京まで四時間、中京圏まで二時間というアクセス

県境をまたぐ難事業だけに、今後の建設促進に向けては、従来の石川県だけにでなく、岐阜県との密接な連携の構築が不可欠となる。

ルート検討後 に計画を決定

関係者によると、指定後は、具体的な整備に向けて、基礎的データの収集、ルート検討を行ったうえで、正式な区間や、分割化も含めたトンネル計画を決定し、十年後の完成をめどに着工に入る運びだ。

17期同期会報告

1994年2月19日午後3時過、JR米原駅新幹線改札口前。冬の陽が少し傾き始める。大家慎一君、小間八郎君がいる。杉本義一君、藤野達人君、藤井芳治君、宇野和子さんが続いて着いた。恵比寿泰子さんが「しらさぎ」で着いた。急いで北陸線の普通電車に乗り換える。懐かしい顔が揃う。数年振りから卒業以来の顔もある。虎姫駅で下車する。「虎姫」、「浅井」などワングルで覚えた懐かしい地名が出てくる。めざすは「須賀谷温泉」。宿のマイクロバスに乗り込む。他のお客さんと一緒に定員オーバー。山行のアプローチの怪しげな乗り合いタクシー顔負け。

「須賀谷温泉」は浅井長政の居城「小谷城」の城趾のある小谷山の南麓にある静かな一軒宿で、ワングル向きである。

早速湯に入る。鉄分の多い温泉だ。温泉はそこそこにして夕食だ。メニューは猪と鴨鍋。都合で遅くなった小島敬君が着いた。わいわいがやがやで盛り上がる。夕食を終えて部屋に戻り話の続きを。そこへサンディエゴの出張から帰り、横浜の自宅に30分寄っただけで駆けつけた川村高弘君が現れる。17年以上前の金沢の下宿の深夜の雰囲気近づいていく。しかし齢四十を越えたせいかな午前3時に就寝。

翌朝、朝風呂、朝食を済ませて宿のマイクロバスで長浜駅へ。電車で時間があるのでバスで米原駅へ。ここで小島（旧姓野村）幸子さんと落ち合う。彦根城に行き、近江路の風景を楽しむ。彦根市内のレストランで近江牛の焼肉で少し遅い昼食をとる。食後、来秋の再開を約してそれぞれ帰路に着いた。充実したそして元気を取り戻せた二日間でした。

1994晩秋 渡辺和文 記



追伸（原稿が遅れてOB会事務局の皆様には多大の御迷惑をおかけし、誠に申し訳ありません。期限内に物事ができない悪しき習癖はいまだ直らず、三つ子の魂百までとはよく言ったものです。そこでせめてもの償いとしてOB会諸兄弟の皆様にはささやかな旅情報をお届けします。）

遠山郷（下栗の里：長野県下伊那郡上村下栗）の御案内

ワングルOB諸氏にはご存じの方も多いかと存じますが、何度行っても大変良いところですので御紹介します。

■特徴

- ・南アルプス南部（聖岳、兎岳などを）眺められる「日本のチロル」と呼ばれる景色のすばらしい鄙びた山村集落です。
- ・御家族でのんびりと南アを眺めるのに最適。

■ルート

- ・中央自動車道・飯田ICからR153、県道上飯田線（矢筈トンネル経由）上村、村道経由で下栗。（約1時間）

■宿

- ・高原ロッジ下栗：

1泊2食¥6,000円（子供¥4,000円）

部屋は洋室のツイン。トイレ、浴室は共同。

下栗分校の跡に建てられた村営ロッジ。現在は元東海大学ワングル主将の38歳の方が御夫婦で管理人をされている。素朴な山の幸の食事がおいしい。

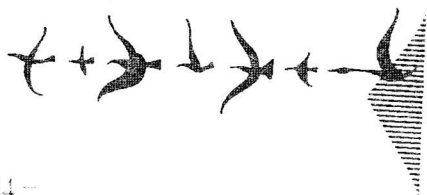
（詳しくは「ラバン」1994年10月号学習研究社刊P.18～27に掲載されています。）

- ・他に民宿が2軒。
- ・しらびそ高原にはしらびそ山荘、大平高原には大平保養センターがある。（いずれも村営）
- ・しらびそ高原にはオートキャンプ場があり、南アルプスを目の前にしたキャンプも楽しめます。

■歩く

- ・尾池山、尾高山へのハイキングが楽しめます。（それぞれ往復3時間程度）

（遠山郷は'82年に同期の小島君に連れて行ってもらって初めて知り、翌年妻子と一緒にいき、その後行く機会を失っていましたが、今秋11年振りに訪ねました。）



1995年1月6日

金沢大学ワングел15期会開催の案内(1)

新年明けましておめでとうございます。

本年もどうぞよろしくお願いいたします。この正月だけは神様も仏様もずいぶん身近にいるようですので、40代の半ばへ向かう我が身や家族の健康と安泰をお願いしています。ちなみに、私の家では“かまど”の神様にも鏡餅を供えて火の安全を祈る田舎の習慣が続いています。

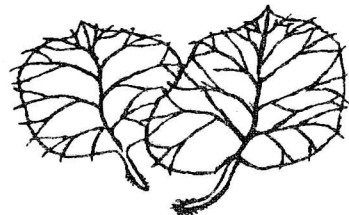
さて、昨年5月の滋賀県朽木村・朝日の森自然研修所におけるワングел15期会には、教え子の結婚式のために出れなくて残念だったのですが、今回は能登でという提案にみんなの賛成が得られたということを幹事の横井君から聞き、丁寧な引き継ぎも受けました。

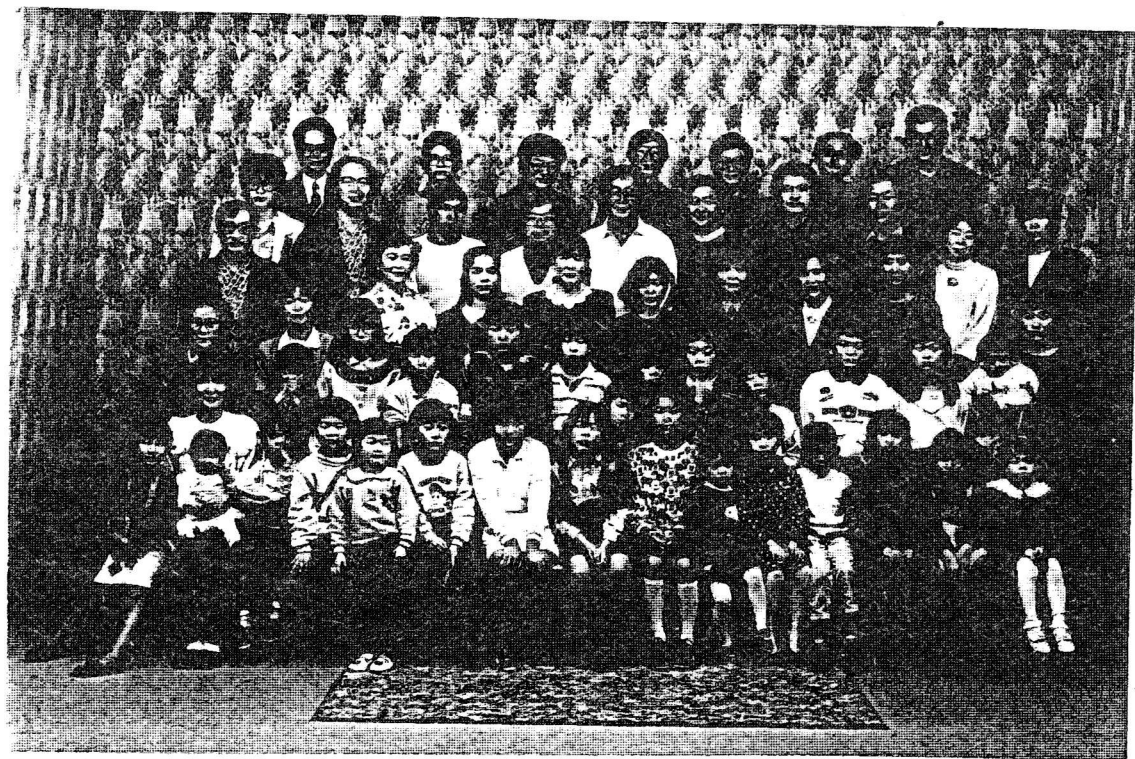
思えば、このワングел15期会は昭和60年に愛知県蒲郡市の三谷温泉で開催されたのが第1回です。その前年までに15期のメンバーは全員結婚してしまい、それまでのように結婚式で多くの人と顔をあわせるという機会もなくなってしまったところから発案されたといえます。以来、下記のように回を重ねて今回は第10回の記念大会となります。栄光の(?)記念大会なので幹事は正月も返上して企画立案にあたっており、さらに、みんなの協力により、飲んで歌って語り合い明日への活力となるような会にしたいと考えていますのでどうぞよろしくお願いいたします。

回	開催年月	観覧	開催地	幹事
1	昭和60年(1985年)3月	愛知	三谷温泉	佐野・増田
2	昭和61年(1986年)11月	京都	京都市内	金井・三宅
3	昭和62年(1987年)11月	石川	一里野温泉	上馬
4	昭和63年(1988年)11月	奈良	奈良公園	松縄
5	平成元年(1989年)11月	福井	宮崎村	間所
6	平成2年(1990年)11月	静岡	久能山	増田
7	平成3年(1991年)11月	石川	金沢市	舟田 ↓ 鈴木
8	平成4年(1992年)11月	兵庫	舞子	宇野・金井・高村
9	平成6年(1994年)5月	滋賀	朽木村	横井・佐野
10	平成7年(1995年)11月	石川	能登	坂尻

※平成5年はKUWVの35周年記念行事のため開催せず

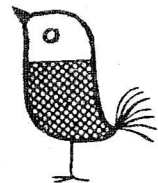
※記憶間違いなどがあったらゴメン





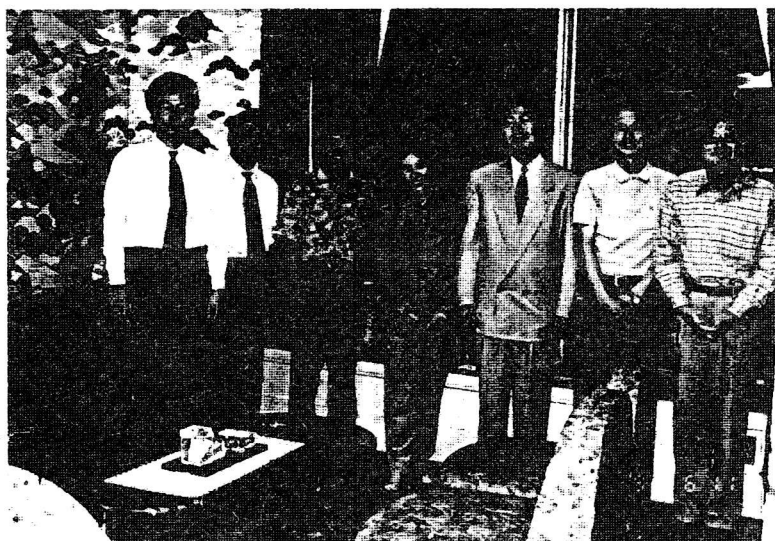
この写真は平成3年のもの。「懐かしの金沢」ということで、15家族、56人が参集（大手堀前KKR加賀貸切）。宴会前のしらふのうちに、次回幹事が決められるが、そのビンボー籤を引いた者は、「安く」「騒げて」「50名は収容」できる施設探しに奔走せねばならないはめになる…。子供達同士が顔なじみになり、遊び興じてくれる様は親同士にも、嬉しい光景だった。だった…と言うのは、そろそろ子供達が独立し始め、どうやら今後は大人だけの集まりに収束していきそうな気配だからである。

それによし。同じワングルの飯を喰って社会に船出した仲間達は、いつまでも心おきなく騒ぎ語り明かせる仲間達である。



4月30日、17期小島さんより、
「この5年くらいの間に周辺の期によびかけての（10名前後参加の）ワングル会を開催してきたが、今度は東海地区ワングルOB80名余りの全員に拡大して呼び掛け、開催しようかと相談し合った。ついには金沢から、金沢の情報を運んで参加してもらえないか？」との打診がありました。役員会でも相談の結果、応援の体制をとることになり、3名の役員が参加しました。この写真は、前回の時のもの。

（今回のものは間に合わず、次回に掲載の予定）



『東海ワングル会』

1995. 5. 3

15期舟田さんたちのご尽力でワングルOB会が隆盛の由、ご同慶の至りです。ベルクハイムも修復し、今秋にはベルクハイムで「月見の宴」が催されるとのこと。そうはいつでも、皆多忙な社会人ばかり。なかなか金沢まで足を伸ばすことはできません。

それで、『東海ワングル会』を東海地区（愛知、岐阜、三重、静岡）の全OB、OG（約20名）に呼び掛けて下記要領で開催することといたしました。

OB会長の大島さん（13期）や事務局長の舟田さん（15期）、鳥越さん（23期）に参加していただいて、現地情報も聞けるようにしたいと思います。しばらくワングルから遠ざかっていた人、近所なのになかなか集まれなかった人も、これを機会にご参加ください。

（ご夫婦での参加も歓迎します。）

あの先輩や後輩にも久し振りに会えます。お誘い合わせの上おいでください。

記

日 時：1995年7月1日（土曜日）午後6時～8時30分

場 所：国際サロン（オレンジ・ルーム）〔名古屋駅前・毎日ビル9階〕

☎ 052-581-8600

名古屋市中村区名駅4-7-35

立食形式

平服どうぞ

宿泊：希望者へのホテル紹介〔J.R名古屋駅から徒歩5分以内〕予約は直接お願いします。

ホテルキャッスルプラザ（S 10千円、T 16千円）

☎ 052-582-2121 FAX 582-8666

名鉄グランドホテル（S 9千円、T 18千円）

☎ 052-582-2211 FAX 582-2230

ホテルアソシア（S 9千円、T 16千円）

☎ 052-561-3751 FAX 581-3236

お手数ですが、5月31日（水曜日）までに、同封の葉書で出欠をお知らせください。

〔発起人：16期川端（682-2432）、17期渡辺（502-0477）小島（892-1224）、18期森（881-2377）〕

東海ワッゲル会

参加報告

*出席者

9期 伊藤 俊成	名古屋市
9期 白井 勇	桑田市
11期 石田 清久	半田市
12期 杉森 和義	半田市
13期 大島 良治 (来賓)	金沢市
13期 岩田 実	名古屋市
13期 柴田 茂樹	名古屋市
13期 柴田 訓子	名古屋市
15期 舟田 節子 (来賓)	金沢市
15期 佐野 哲雄	岡崎市
15期 祖父江直久	名古屋市
16期 川端 俊朗 (世話人)	名古屋市
16期 清水 重仁	岐阜羽島市
17期 小島 敬 (世話人)	名古屋市
17期 小島 幸子	名古屋市
17期 渡辺 和文 (世話人)	名古屋市
18期 森 博彦 (世話人)	名古屋市
21期 羽根 嘉隆	伊勢市
23期 鳥越 伸博 (来賓)	金沢市
23期 浅輪 郁代	小牧市
23期 窪川 淳一	刈谷市
25期 金山 裕之	半田市
25期 辻村 善徳	春日井市

15期 舟田 節子

(本当は、苦勞された小島さんに書いてもらえばいいのですが、会報発行を優先し、とりあえずの報告を…)

金沢組3名は、しらさぎ10号で名古屋へむかう。こんな支部誕生に出掛けられるなんて、後5年の間に何が出来るか?と不安だった頃と比べれば夢のよう。

迎えに出てくれているはずの渡辺さんとは出会えず、変更された会場・名古屋国際センター25F東天紅へ3人でルートファイディング。無事到着。35周年でお会いした顔、久しぶりの顔、初めての顔、それぞれに3つのテーブルに分かれ、もう和やか。それでも一応の式次第にのっとり…と司会の16期川端さんが前に出る。

挨拶、乾杯に続き、自己紹介。年賀状に書きたいばかりに何とか一年に一度は登るようにしていたが…や、久しぶりに見た先輩の顔と、自分の顔を見比べて…と、楽しい近況報告や山との関わりの話が続く。中華料理が次々と運ばれ、昔ながらにまめな人はさっと分配係に回り、誰かがやってくれと、誰かは食べる人に専念し…自然に分担が決まるのが、これまたワッゲルらしいところ。

続いて、スライド映写。椅子を寄せ、「もっと前に」とプロジェクターの机をずらした途端、折り畳み式の足が崩れ、並べてあったスライドが絨毯に飛び散る。一同思わず、テントの中で鍋がひっくり返ったあの無残な光景を蘇らせたのでありました。

かくして、白山、高三郎、鳴谷山は「渾然一体」となり、縦位置のものは「今度は左が上で」「ああ、これは右が上ですねえ」と、頭の中も外もグルグルと体操する羽目になる。それでも懐かしんでもらえたようでした。

それまで、後ろ姿で小さく登場していた夫の正面が、三男坊と共にシャクナゲをバックに登場。「皆さん、感謝しましょう。」と声がかか



*式次第

- 1) 発起人挨拶 (17期 小島)
- 2) 来賓挨拶 (OB会長 13期 大島)
- 3) 乾杯の音頭 (9期 伊藤)
- 4) 参加者の自己紹介
- 5) OB会近況・スライド映写 (15期 舟田)
- 6) ワッゲル歌
- 7) 閉会の挨拶 (16期 川端)

受付 (13期柴田 17期小島 23期浅輪)

カメラ (17期 渡辺)

会計 (18期 森)

る…「ありがとうございます」とすかさず合掌する人がいて、爆笑。

もう、時間切れ間近。テーブル毎に、ワングル歌を歌う。何やら微妙に、ズレがあるよう。歌詞が自然に出てくることに感激する人あれば、何も出てこなくなったことに感慨する人もあり。

名残おしく閉会。つい、「これから、よろしく」と挨拶して回る私に、「今日は<来賓>だろ!」と先輩の声がかかる。

いつか一名実ともに<来賓>になりたいもの。せわしく車中の人となりました。

東海ワングル会

不参加者からの連絡

*4期 森島 稔

・7月1日が定期異動の日になっており、異動するかも知れずですので、残念ながら欠席
・昨年の白山行ができなかったことが今も悔やまれるが、大島会長や舟田さん達にお世話になりうれしかった。よろしくお伝え下さい。
・東海ワングル会、発起してくれた4人の侍に感謝しています。今後共よろしく。

*6期 今井 春昭

懐かしい皆様方にお会いできることを楽しみにしておりましたが、当日は公用の会議のため出席できなくなりました。特に3-9期の皆様には、あの頃の思い出を含めて感謝し、御活躍を祈ります。

この会が今後度々開催されることを期待しています。

*7期 大磯 岩雄

親の世話で今回は失礼します。山への憧れはいまだに失っていません。子供はついでなくなりましたので、妻と時々登っております。

*19期 佐野 吏

1年生合宿の南アルプスへの想いがいまだに

続いており、年2-3回は北岳周辺に登っております。4月には鳳凰三山に行って来ました。春山としては手頃なので最近よく行きます。北岳の方へ来る時は声をかけて下さい。

*22期 安達 敦子

ワングルで過ごした4年間の何倍もの月日が経ているのに、当時の自分の思いは鮮明です。いい時期にいいところで過ごさせてもらったと、幸運に感謝します。

東海ワングル会の発足で、またひとつワングルが近づいてくれたことをうれしく思います。御苦労様です。



下のような連絡を受けています。この会報がお手元に届く頃は、締切の7月10日を過ぎていることでしょうか、ご都合のつく方は、世話役の山口さんにご連絡下さい。

KUWV 21期生卒部15周年懇親会と 江口喜美江さんの墓参りのお知らせ

95.6.18

今夏下記の予定で21期生が名古屋に集まります。つきましては、名古屋近辺の方にもご参集いただければと思います。参加される場合は、7月10日頃までに、山口までご連絡下さい。
連絡いただく内容は、①懇親会のみ②墓参りのみ③両方参加のいずれかと、④宿の必要性の有無です。

日程：平成7年8月5日(土)～6日(日)

5日午後6時より懇親会

6日午前9時頃宿出発し江口さんの墓参り
(自由参加、墓参り後解散の予定)

場所：KKR名古屋三の丸

名古屋市中区三の丸1-5-1

TEL 052-201-3326

地下鉄・鶴舞線「丸の内」駅下車、1番出口より徒歩6分、JR名古屋駅からの場合 地下鉄・東山線伏見駅で乗換えて鶴舞線「丸の内」駅

宿泊可、費用8,300円程度(1泊朝食付き)

懇親会費：8,000円

21期出席予定者：足立睦俊、石田郁子、大沢安一、加藤万里子、河嶋京子、滝本民夫、竹内和彦、竹本彰、田坂優好、丹野裕一、土屋寛之、樹睦美、羽根嘉隆、山口克己

以上、ご検討下さい。参加をお待ちしています。

山口 克己 tel 0298-38-2888

久しぶりの高三郎

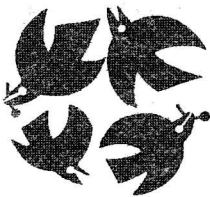
18期 椿川 利弘

ゴールデンウィークの次の週の金曜日の夕方、梶（19期）から明日からの土日で高三郎に登らないかとの電話があって、メンバーを聞くと、栃尾と深田夫婦（いずれも20期）それに梶の女房（21期）と全員がワンゲルOBであったので、突然ではあったが、即OKした。しかも、この6人は18年前の現役の1年生から4年生にあたるのが後でわかり、梶リーダーのもとチームワークも抜群で4年生の私はもう楽珍でした。（少しバテたが！）

行程はベルクハイムで1泊して翌日高三郎の往復なので、今秋の月見の宴に高三郎へ登山される方の参考に、ここに久しぶりの高三郎について紹介したいと思います。

土曜日は、途中貯水池わきにある故高桑氏（19期）の墓にお参りして、犀川ダムから1時間半程でベルクハイムについた後、少し時間があつたので、水場までの道を整備することにした。夜は、近くで採ってきたウド、カタハ、スズタケ等の山菜とレトルトの牛丼、それに少々のお酒でささやかな宴会となった。

次の日、朝早く金沢から出てきた深田夫人と合流して、8時頃ベルクハイムを出発した。水量豊かな倉谷の流れを横目に見ながら新道登り口に到着した。新道は昔どおり急ではあるが、踏み跡もはっきりしていて歩きやすい。ザック置き場で休憩した後も道は同じような状況で、成ヶ峰の分岐まで2ピッチ、2時間程度かかった。途中、ヤブツバキが道沿いに咲き乱れ、ウラジロヨウラク、タムシバ、その他の花や木の名前を梶に教えてもらいながら、高三郎までは意外と近いと思って歩いた。



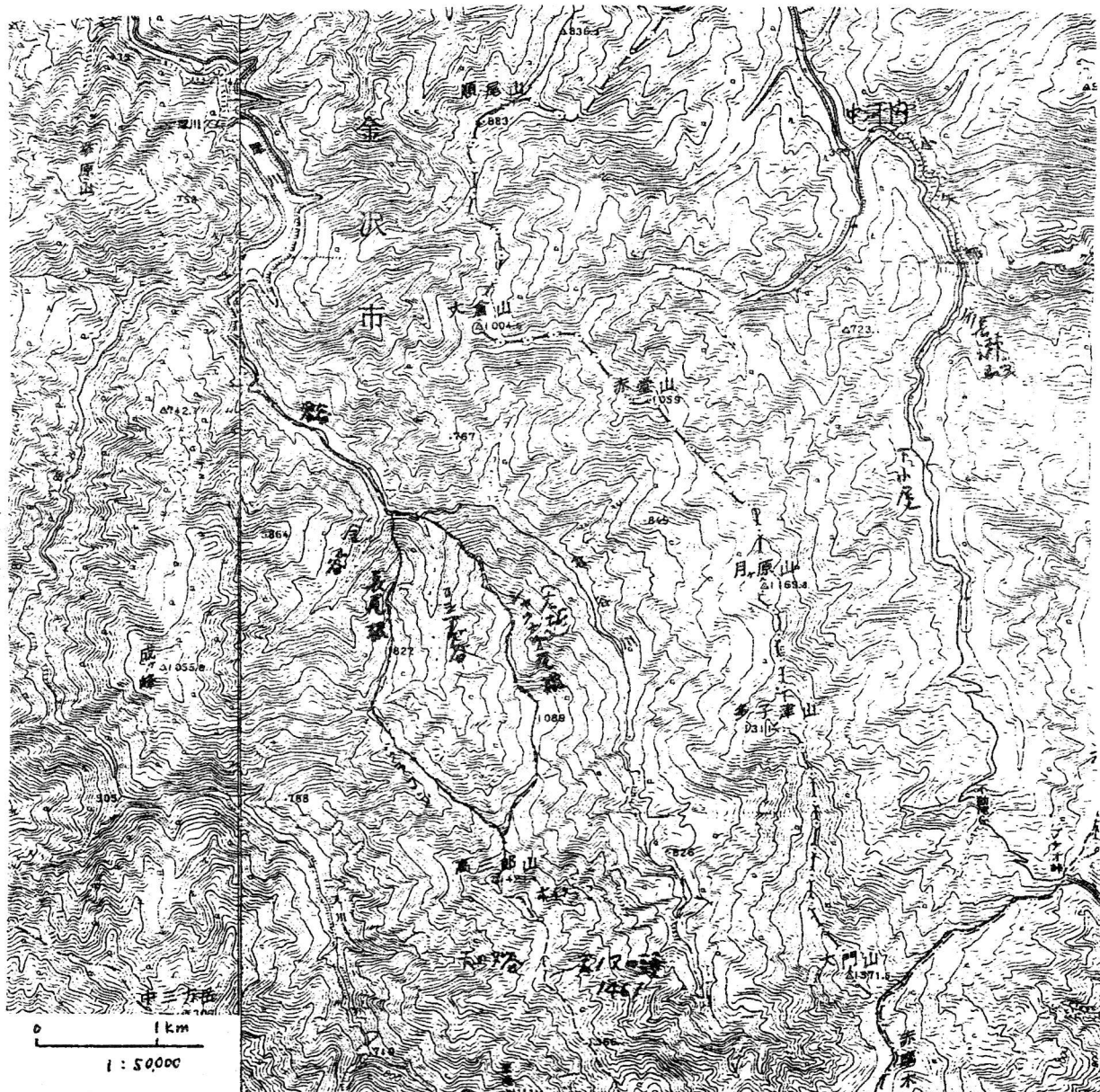
しかし、そこからはヤブこぎのうえ、痩せ尾根で危険で、とても1ピッチで高三郎は無理とあきらめ、旧道とつぎの急登部で休憩することにした。ここまではシャクナゲの花がとてもきれいで、昼寝岩（今でも言うのかな？）はほんとさせてくれた。旧道に出てからはほとんど残雪の上を歩くことができ、4時間かかって正午に山頂に立った。

雪に覆われた山頂では、新緑の犀奥の山々を見渡すことができた。心配していた雨がポツポツ降ってきたので、寒くてビールもすすまなかったが、とにもかくにも14年ぶりのピークはひとしをであった。

帰りは旧道を下りることにした。旧道は、新道ほど歩きにくくはないが荒れていて、尾根の広いところでは道が分かりづらくなっていた。そこはグループ叢のメンバー、すばやくルートファインディングしたので、予定どおり2時間半でベルクハイムに着いた。

以上簡単にルートの状況を書いてみたが、思い出して頂けたでしょうか。私は、みんなで紅葉の高三郎をもう一度登りたいという気持ち半分と、こんなしんどい山はもういいという気持ち半分です。

なお、2、3年前から、OB会役員になったことや週休2日制、体力の増進等々で月に1回程度は山に登るようになったので、機会があれば昔の仲間と一緒に登れればと思っています。



事務局長とその夫は、東海ワングル会披露用のスライドを撮るため、椿川さん達の一週間後に登ってきました。(お互いに知らなかった。)今、高三郎は、数年に一度、一念発起して体力試しに登りに行く山です。とはいえ、在部中はシャクナゲを見た覚えがなく、ピークを踏んだのも一度だけだったように思います。猿ヶ山と大門の間に、白馬から槍まで北アがずらりというのは今回が初めてでした。

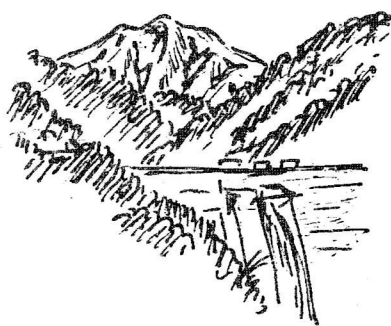
そして倉谷まで戻ってきて、新トレの現役達に会いました。テント村ができているのは嬉し

い光景…。こんな所まで押し掛けるOBなんて、立派なのか？迷惑なのか？まあ…立派としておきましょう。

月見の宴の下調べもすみましたし…。尚、現役達が付けに行ったBHの鍵のナンバーは
594 です。

事務局長のコースタイム

ダム (1時間10分) BH (15分) 新道取付 (1時間35分) 犀滝分岐 (1時間15分) 昼寝岩 (1時間) 分岐 (30分) 高三郎頂上 (15分) 分岐 (40分) 1089 P (1時間30分) 旧道取付



*犀川ダムー倉谷

以前より灌木が生い茂り、ダム湖がほとんど見えない状態になっています。しかし、踏み外せばダム湖に落ちてしまうことに変わりはありません。足下が見えにくくなっている分、より危険になったとも言えますので、十分注意して歩いて下さい。

ダムから二つ目の切れ込みは、水平のまま進むのではなく、河原へ降りて沢を横切るようになっています。

出島と呼ばれる辺りは、昔は270度の展望で広いダム湖を眺めることができましたが、現在は60-90度の視界といった所です。

倉谷集落跡から、テントサイトのある河原に至る途中に、倉谷川が蛇行し滞っている箇所があります。ここは浸食がさらに進み、護岸の石組が沈下しています。岸伝いに通過するようにして下さい。

*新道

新道取っ付は金山谷を渡ると、テント一張分の平地があり、その向かいです。標識はありません。ロボット雨量計のある983Pとの分岐までの「長尾根」と呼ばれる部分が、現在高三郎山中では最も整備されている箇所です（その筋の手が入っているのか、釣人が通るのか）。クラコシ尾根に入ると、道は樹林帯にやや残っている程度で、道がないという方が良心的です。灌木に足をとられると真下がないといった箇所もあり、通過はほんの春先に限られます。

*分岐ー頂上

灌木におおわれかなり厳しい状態です。シャクナゲの頃であれば、残雪で被われ、楽に通過できます。ピークの熊笹の茂みの中に三角点と案内板（朽ちて地面に置かれている）があります。



*旧道（下りの場合）

まず分岐が要注意です。頂上から15分ほど尾根伝いに下りてきた所で、手前にある旧道尾根に向かうようにして下さい。旧道に入るとすぐロープがあり、下はザラザラの土が剥き出しになってえぐられています。つかまる枝を確かめて慎重に下りて下さい。

続く道ははっきりしていますが、小枝がかなり出てきています。迷いやすいのは、1089Pの下りあたり。なだらかなピークで、ここから左よりに進むのですが、誰もがここで迷うらしく迷い跡のため、余計迷い易くなっています。疲れていたり、時間に追われとるとますます迷いますので、冷静に尾根を読んで下さい。旧道往復の場合であれば、登りの時に赤テープをつけていけるとよいでしょう。

最後の30分はとにかく急坂です。昔のリーダーのにつっき声を思い出し、あるいはリーダーだった頃の声掛けを思いだし、気を引き締めて下りて下さい。

OB会会計報告

(平成 6年 1月 1日～平成 7年 6月30日)

会計 23期 鳥越

《 収 入 の 部 》

35周年記念事業繰越金	707,169
OB会費納入 (214名)	1,935,000
寄付、カンパ等	44,313
預金利息	1,224
計	2,687,706

《 支 出 の 部 》

OB会報 (やまざと) No.1制作費	65,852
〃 郵送料	84,930
〃 No.2制作費	125,939
〃 郵送料	105,360
平成 6年度小屋作業差し入れ	50,000
OB・現役 (3年) 懇親会	100,712
21期村中さん香典	10,000
その他諸雑費	24,611
計	567,404

《 差 引 剩 余 金 》

収 入 の 部	2,687,706
支 出 の 部	567,404
差 引 合 計	<u>2,120,302</u>

以 上

主将の挨拶と部の近況

38期 佐川 貴久

主将になってまず初めに思ったことは、果たしてワンゲル主将とは？ということでした。

昔はどうだったかわかりませんが、今のワンゲルでは、普段主将がやらねばならない仕事は、具体的に「これだ」というものはありません。というか、一人勝手にそう思っています。主将よりも、L会やP審の議長、あるいは各山行のリーダーの方が、多分たいへんでしょう。

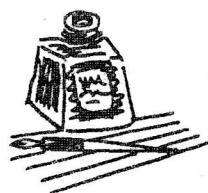
結局のところ、今現在においてはあまり自覚も仕事もないまま、平和に主将を務めていますし、今後もそんなに意識しないで気楽にやっていけるだろうと、楽観的に考えています。

主将が頼りなければ頼りないなりに、部員の各人がしっかりしてくれるだろうし、それぞれが自分のやりたいことをやっていくことが、部の活性化にもつながっていくのでは—と思っています。

さて、部の近況ですが、今年は新入生の出入りが激しく、なかなか数が確定しなかったのですが、現在の所12名ということではほぼ落ち着いたと思います。

ふだん具体的に何をしているのかということですが、トレーニングは、月・水・金の週3回角間周辺を30分ほど走って、その後軽く筋トレをやっています。練習量は城内の頃とそれほど変わっていませんが、雨天時のトレーニング法がまだ確立されておらず、雨の時は思いつきで屋根のある所を探して、そこでできることを何かしています。

そして練習が終わって午後7時から部屋でL会・P審・L権審議などを行います。以前の部屋に比べると、蚊や虫がいなくなったのはいいですが、音楽系のサークルがちょっとうるさい。



ところで、ワンゲル部員の経済状況はというと、特に新入生にとっては非常にきつい。まず部費と保険で7000円、その他山行では、高三郎新トレ、第1回トレ山、第2回トレ山、夏合宿本番とでそれぞれパーティーにより多少異なりますが、4000円、3000円、7000円、20000-30000円くらいかかります。この辺は下界で生活していても食費などはかさむので、それほどの負担とはなりませんが、問題はやはり装備で、全部揃えると7-9万円くらいかかってしまいます。一気に揃えるのはやはり厳しく、OB、先輩、あるいは辞めてしまった人などから借りたり、あるいは譲ってもらったりしながら、ゆっくり揃えていきます。

その他、学生生活で、角間に移って変わったことといったら、やはり交通が不便になったこと、学生街が小立野から旭町周辺に移動してきたこと、2年前から学部へ上がる際の仮進級制度ができ、留年が減ったなどです。

今年は角間にすべてが移ってから2年目で、まだワンゲルも大学も発展の途中です。

もし金沢に来る機会がありましたら、山の中ですが、是非ワンゲルの部屋にも立ち寄ってみて下さい。

第38期運営方針は、37期と比べて変わった所は、(2)年間行事に関して、冬、春合宿の参加が義務ではないとしたこと、及び、5月の末に雪上訓練を取り入れたことです。この他は基本的に大きな変更はありません。以下、全文を掲げます。

第38期ワンダーフォーゲル部運営方針

(1) P.W.

P.W.とは、行きたい者が、メンバーを募り、行きたい場所へ行くというもので、基本的には部の活動の一貫ということになるが、参加はあくまで部員個人の任意によるという点において、行事とは一線を画するものである。また、部の活動として、最も理想的、かつ自然なものであり、主眼とすべきものである。

<P.W.に関する規定>

- 1 : P.W.として活動を行う場合には、P.W.審議会に計画書を提出し、その許可を得なければならない。
- 2 : 1回生のP.W.への参加について、山行は夏合宿以前、山行以外のものは、新入生トレーニング山行以前であれば、原則として許可しない。P.W.が山行に当たるかどうかの判断は、P.W.審議会に委ねる。
- 3 : 冬山、春山における行事のいずれにも参加していない者は、原則として冬山、春山の参加は認めない。
- 4 : アイゼン、ピッケルを使う見込みのあるP.W.への参加は原則として春合宿参加者に限る。
- 5 : 全てのP.W.において、コースや目標、メンバーについては山行経験、体力等、また、リーダーについては、リーダー経験等の諸条件から判断したパーティー編成をP.W.審議会で検討する。
- 6 : P.W.は先程述べたように、行きたい者が行きたい場所へ行くというものであるため、参加者のうちリーダー権のある者なら誰でもなれるということは、いうまでもない。発案者がそのままリーダーになるという形式にも幾つかの利点はあるが、特にそれにこだわる必要はなく、パーティー内で意欲のある者、最も適した者がリーダーになるのが望ましい。

7 : 一つのP.W.がP.W.審議会で許可を得た場合、その発案者は速やかに、そのP.W.の目的、行程、内容、メンバー条件等の詳細を、他の部員全員に知らさなければならない。

8 : P.W.の計画は、顧問、及び学生係の許可を必要とする。

(2) 年間行事

行事は山行など部の活動において、全部員にとって必要性の認められるものについて行う。すなわち経験を積み、技術を修得するといったことがその後の活動の基礎になるのである。したがって行事に参加することは全部員の義務であり、発案段階から実施に至るまで、関与する部員全てに積極的に参加及び協力の義務がある。年間行事の計画は顧問教官及び学生係の許可を必要とする。

但し、冬、春の合宿、そして今回から行われることになった雪上訓練はとりあえず年間行事に含まれるが、この3つについては例外的に義務とはしない。

(3) ワンデイハイク

ワンデイハイクの基本的性質はP.W.と何ら変わらない。十分に安全であると判断できるものについて、部内の判断によって認められる活動形態である。

<ワンデイハイクに関する規定>

- 1 : ワンデイハイクとしての活動を行う場合はP.W.審議会に計画書を提出し許可を受けなければならない。通例、ワンデイハイクは日帰りであるが、場合によっては、それ以上でも認められることもある。その判断は、P.W.審議会に委ねる。
- 2 : 1回生のワンデイハイクへの参加は、新入生トレーニング山行以前でも認める。
- 3 : リーダー資格、サブリーダー条件、欠員等については、P.W.、行事と同じくする。

(4) リーダー資格及びサブリーダー条件に関して

リーダー資格は、リーダー審議会の行う審議を受けた後に与えられる。

<リーダー資格及び、サブリーダー条件に関する規定>

- 1: 1回生で一連の審議を受けた者は、夏合宿以降、山行以外のリーダーとなりうる。この場合、リーダー経験者がサブリーダーとなる必要がある。
- 2: 夏山で初めてリーダーとなる者は、3回生以上の山行リーダー経験者をサブリーダーにする必要がある。
- 3: 雪山においては3回生以上の冬山リーダー経験者をサブリーダーとする必要がある。
- 4: 川下りなど、山行以外の知識、技術を要するP.W.ではサブリーダーにそれらの経験者を必要とする。
- 5: ロードなど山行以外の活動においても、サブリーダーはリーダー経験を必要とする。

(5) 運営機関

1: 総会

総会は全部員で構成される部の最高決定機関である。

2: 代表会

メンバーは、各学年ミーティング議長、主将、副将、リーダー会議長、P.W.審議会議長を基本とするが、必要に応じて関係部員の参加が望まれる。ここでは、各学年ミーティングで話し合われた内容のうち、総会を召集するに及ばない内容、日程の都合等で総会が開かれない場合などについて話し合いがもたれ、場合によっては総会に代わる決定権をもつ。

3: 各学年ミーティング

部の運営に関することについて話し合いが必要な場合、各学年のミーティング議長の召集によって開かれる。

4: リーダー会 (L会)

リーダー会は年間行事の審議機関であり、前期(4-9月)は2-4回生、後期(10-3月)は1-3回生によって構成される。

(6) 欠員

欠員とはパーティーにおいて欠くことの出来ない最低限度の人員をさす。

<欠員(不可欠員)について>

1: 山行における欠員は原則として5名とする。その内訳はリーダー、サブリーダー、そして医療審議を受けた上回生を含み、かつそれ以外2人いるわけである。

2: リーダー、サブリーダー、そして医療審議を受けた上回生のうち2人が事故者に付き添い、残る1名が連絡員、もしくは残りのパーティーを指揮する。但しこれは、あくまで事故者が1名の時の、しかも基本的なもので、事故の状態などによってはリーダーの臨機応変な判断に委ねられる。

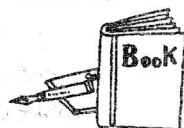
3: 山行以外の活動の欠員については、その都度検討が成される。山行かそうでないかの判断はP.W.審議会、リーダー会に委ねる。

4: 医療審議についてはリーダー審議会に委ねる。

(7) 個人山行

個人山行とは、部の、また学生係の審議、許可を受けずに山行にでかけるものである。

(山岳会等においてはこれにあたらぬ) 事故にあった時、その責任を個人で負いきれず、部全体に迷惑がかかることを考えると好ましくない。が、山行経験を積むことは、いうまでもなく大切なことであり、個人山行を禁じることはそれを閉ざすことにもなりえる。以上により、本年度も禁止しないことにする。が、もちろん事前に部、または他の部員に連絡し、計画書等を提出することは最低限のマナーであろう。



(8) 備考

この運営方針に直接の規定がないものについて判断の必要が生じた場合には、これまでの部の慣習または一般的に適当であると考慮される基準について判断が下される。

<連絡機関>

1: 山行計画書には、確実な連絡体系を確保するため、必ず以下の連絡先を明記しなければならない。

パーティーメンバー宅、及びその実家

大学学生部

顧問教官宅

現役部員連絡先2名宅

2: 現役部員連絡先の2名は、他りの全部員への連絡体系(連絡網)を確認、把握する。またその2名は、いついかなる時間帯でも連絡を受けられるような姿勢であることが望ましい。

<自家用車を使用した山行(車山行)>

について>

P.W.や行事の交通手段として、自家用車を使用することは、交通事故、運転者の負担を考えると好ましくない。しかし、時間的に制約されている場合などでは、公共の交通機関を使うことが難しいと思われる。よって安全面からも、部として次のように定める。

1: 山行で自家用車を使用して起きた事故に関して、基本的に部は責任を負わない。

2: 各パーティーは、自家用車を使用する際、走行距離1kmにつき25円を基準とする謝礼を運転者に支払わなくてはならない。

3: 山行リーダーは自家用車を使用する際、運転者の精神的、肉体的負担を考慮に入れて、計画をたてなければならない。また、運転者に対して、事前に説明を行わなければならない。

4: 車の所有者は、自家用車の使用を強制されない。



94年度行事及びP. W.

*赤谷山ワンデイハイク 11/4-5

馬場島-ブナクラ峠-赤谷山-馬場島

L浅野 SL佐川 宮本 吉原 阪本

*初冬大笠山トレーニングPW 11/12-13

旧桂集落-前及-~~一~~-大笠山-旧桂集落

L新堀 SL藤巻 福田 吉原 佐川 ミリアム

*冬合宿 荒島岳 12/24-27

登山口-小荒島岳-シャクナゲ平-荒島岳

-シャクナゲ平-勝原スキー場-勝原駅

CL山本 SCL山口 (含む3年8名 2年14名

1年8名 前田顧問)

*策ヶ岳PW 1/7-9

金沢-身延-~~一~~馬場-~~一~~布引山-策ヶ岳

-馬場-身延-金沢

L金吉 SL石川 田中 友野 宮本

*春合宿偵察 3/10-11

金沢-神城-五竜遠見テレキャビ山麓駅-

地藏の頭-~~一~~背髪-地藏の頭-神城-金沢

L柴田 SL山口 新堀 藤巻 福田

*春合宿 遠見尾根 3/20-23

金沢-神城-テレキャビ山麓駅-地藏の頭

-小遠見山-大遠見山=白岳-地藏の頭

-神城-金沢

L柴田 SCL山口 (3年7名 2年13名 1年5

名 計25名)

*大笠山~~策~~ヶ岳PW 3/25-4/2

金沢-セイモア-奈良岳手前-沈殿-赤摩

木古山-沈殿-赤摩木古山越えた鞍部-

沈殿-タカンボウ山-西赤尾

L石川 SL田中 小泉 佐川 新堀 藤巻

*1. 2年山行

<南紀ロード 3/28-31 >

金沢-~~一~~紀伊勝浦-滝前-太地駅-~~一~~グリー

ンピア南紀-太地駅-串本駅-~~一~~潮岬キャン

プ場-串本駅

L正善 SL橋本 ミリアム、西馬

<犀奥 高尾山・吉次山 3/15-17 >

兼六園下-芝原-△吉次山-△奥高尾山-

高尾山-白雲楼ホテル-兼六園下

L宇根 SL佐川 小林 小泉 石谷

<南伊豆ロード 3/28-31 >

金沢-浜松-△今井浜海岸-白浜-△吉佐美

-タライ岬-石廊崎灯台

L友野 SL牧原 吉原 西田 川本 阪本

<ハケ岳 3/28-31 >

金沢-茅野駅-洪の湯-△黒百合ヒュッテ-

東天狗岳-根石岳-夏沢峠-硫黄岳-赤岳鉾

泉-△美濃戸-茅野駅

L宮本 SL金吉 浅野 小西 岩倉

95年度行事

*新歓山行 医王山 4/22-23

CL宇根 (含む3年14名 2年8名 1年8名)

*新トレ偵察 高三郎 5/6-7

金沢大学-犀川ダム-△BH-旧道入口-

ザック置き場-前高三郎山-高三郎-BH

犀川ダム-大学

CL橋本 CSL金吉 (含む3年6名 2年9名)

*新トレ山行 高三郎 5/20-22

大学-駒帰-犀川ダム-△BH-高三郎-

△BH-犀川ダム-駒帰-兼六園下

CL橋本 SCL金吉 (含む3年14名 2年10名

1年4名)

*雪上訓練合宿 5/27-28

金沢-立山駅-雷鳥平-剣沢小屋△-雷鳥平

-立山駅

CL浅野 CSL金吉 (含む3年9名 2年2名

1年1名)



夏合宿

今年は4パーティー出ることになりました。

*北海道パーティー 6泊7日 8月上旬

L牧原 SL宮本 小林 吉原 老田 川本

上田 島田 木下 小川

十勝岳温泉-上ホロカメットク-十勝岳-

オプタテシケ山-トムラウシ山-忠別岳-

白雲岳-旭岳-黒岳-層雲峡

・第1回トレーニング山行 6/24-25

富士写ヶ岳 L小林 SL牧原

・第2回トレーニング山行 7月下旬

2泊3日 L老田 市ノ瀬-別山-

南竜-御前峰-別当出合

*北アルプスパティー 7泊8日 8月上旬

L正善 SL橋本 浅野 小西 後藤 掛布

中野 村井

立山室堂-雷鳥平-剣岳-雄山-浄土山-

五色ヶ原-薬師岳-黒部五郎岳-三保蓮華岳

-双六岳-槍ヶ岳-新穂高温泉

・第1回トレーニング山行 6/17-18

口三方岳 L正善 SL橋本

・第2回トレーニング山行 7月下旬

2泊3日 L小西 別当出合-南竜-御前峰

-大汝峰-中宮道-中宮温泉

*南アルプス北部パーティー 8泊9日 8月上旬

L友野 SL金吉 西馬 西田 阪本 ミリアム

山崎 加藤

北沢峠-甲斐駒ヶ岳-仙丈丈-北丈-間ノ岳

⇔農鳥岳-北荒川岳-塩見岳-三伏峠-塩川

・第1回トレーニング山行 6/24-25

大笠山 L金吉 SL友野

・第2回トレーニング山行 7月下旬

2泊3日 L西田 別当出合-南竜-御前峰

-大汝峰-加賀禪定道-一里野

*南アルプス深南部パーティー

10泊11日 8月上旬

L佐川 SL宇根 高石 三浦 小泉 岩倉
黒須 高岩 前川

井川ー大無間山ー光岳ー池口岳ー黒沢山ー
黒法師岳ー蕎麦粒山ー沢口山ー寸又峡温泉

・第1回トレーニング山行 7/1-2

吉次山・高尾山 L三浦 SL佐川

・第2回トレーニング山行 7月下旬

3泊4日 L岩倉 越後三山

その他の予定

*北陸三県合同ワンデリング 8/23-25
冠岳・浄法寺山 (主宰 福井工業大学)

*小屋作業及び月見の宴 9/21-24

CL正善

*冬合宿 12月下旬

*四回生追い出しコンパ 1月下旬

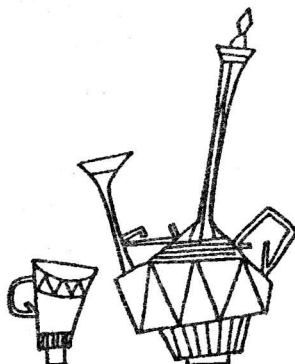
*春合宿 3月

*1、2年生山行 3月-4月

現役部員名簿

*37期 4回生

福田 武志	金沢市天神町2-2-42	22-3240 (呼)
文一史	京都府京都市山科区勸修寺柴山8-258	075-592-8534
山口 陽一	金沢市小立野3-2-21森ハイツ203	22-4844 (呼)
工一機	静岡県富士市今宮620-16	0545-21-1077
柴田 祐介	金沢市田上1-16TTハイム90-101	32-8547
経	愛知県西春日井郡西枇杷島町辰新田65	052-501-2203
戸田 良和	金沢市田井町18-263OM-1 203	33-0776
理一物理	愛知県額田郡幸田町深溝下山村12-1	0564-62-5719
新堀 由佳	金沢市旭町3-12-5ハイツIKKOH2 103	34-3121
文一行	富山県富山市本郷町五区27-6	0764-23-8669
藤牧 康子	金沢市旭町2-6-26AYコーポ103	32-8048
文一史	長野県長野市川中島町原1245-6	0262-93-2337
山本 英男	金沢市小立野1-27-17ドミール小立野102	23-7384
工一機	神奈川県横須賀市公郷4-65-18	0468-53-5498
若山 悟	金沢市旭町3-9-1アメニティ930	32-9513
理一数	石川県輪島市小伊勢町下山下136-5	0768-22-6502



編集後記

猛暑の昨年とうってかわり、冷夏の予報が出ています。今年はどんな夏山になるでしょうか。

おかげ様で、多くのOBの情報が載る会報になってきました。この上半期例年になくニュースがあふれ、多くの方々が災難に巻き込まれました。誰もがこれまでを振り返り、これからを考える機会となったようです。この会報もそんな時代の波に乗り、誌面で情報を交換し、考えていけるものになってくれれば一ひたすら、皆様からの返信と誌面参加をお待ちしています。

なかなか具体的な対策が講じられない遭難対策。今回は3期高島さんとその友人の寺崎さんのご厚意で、貴重な遭難記を載せることができました。まずは遭難<防止>対策ということで、生々しい記録を味わって下さい。

表紙イラストは21期竹中 敏さんにお願ひしました。

秋の月見の宴へのご参加を、心よりお待ち申し上げております。

(事務局長 舟田 節子)

OB会報「やまざと」 95夏号 (3号)

発行日	平成7年7月	
発行者	大島 良治	金沢大学ワンダーフォーゲル部OB会
編集責任者	舟田 節子	事務局 金沢市橋場町10-49
印刷	中川 晃成	☎0762-22-9288